

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
184	明治27年	冬の部	小春日の竿に並べる雀かな	小春	時候
185	明治27年	冬の部	月に吠ゆる犬や十夜の人帰る	十夜	人事
186	明治27年	冬の部	夕しぐれ佐野のわたりを古法師	時雨	天文
187	明治27年	冬の部	箱根越えて灯ともす村のしぐれける	時雨	天文
188	明治27年	冬の部	落潮のいさり火遠くしぐれけり	時雨	天文
189	明治27年	冬の部	船千艘しぐれて暮るゝ港かな	時雨	天文
190	明治27年	冬の部	大方はしくれて衛士の篝かな	時雨	天文
191	明治27年	冬の部	木枯の海山暮れて静かなり	凧	天文
192	明治27年	冬の部	鶏なくや霜の晨の村外れ	霜	天文
193	明治27年	冬の部	霜白し十萬軒の鬼瓦	霜	天文
194	明治27年	冬の部	霜の夜の狐鳴くなり多賀の城	霜	天文
195	明治27年	冬の部	霜白し上人帰る嵯峨の奥	霜	天文
196	明治27年	冬の部	霜の荒野灯残る村のつゞきける	霜	天文
197	明治27年	冬の部	霜きら / \ 朝賀の車つゞきける	霜	天文
198	明治27年	冬の部	月きら / \ 龍湖の氷音もなし	氷	天文
199	明治27年	冬の部	すさましや氷さけたる外がはま	氷	天文
200	明治27年	冬の部	谷底に猪死で氷りける	氷	天文
201	明治27年	冬の部	雪折れの竹の大藪すさまじや	雪折れ	植物
202	明治27年	冬の部	雪の夜を月下の駒の見えずなり	雪	天文
203	明治27年	冬の部	上苑に鶴なく霜のあしたかな	霜	天文
204	明治27年	冬の部	雪の夜や峰を隔てゝ人の声	雪	天文
205	明治27年	冬の部	一山の木魚絶えたり夜の雪	雪	天文
206	明治27年	冬の部	あけぼのや雪の松原馬じるし	雪	天文
207	明治27年	冬の部	冬籠密柑の皮の散らばりぬ	冬籠	人事
208	明治27年	冬の部	冬籠麓の村の鶏の声	冬籠	人事
209	明治27年	冬の部	東路に尼ひとり泣く炬燵かな	炬燵	人事
210	明治27年	冬の部	京の人の文かいてゐる炬燵かな	炬燵	人事
211	明治27年	冬の部	老僧の火桶抱へて眠りける	火桶	人事
212	明治27年	冬の部	吾妹子の袖口赤き火桶かな	火桶	人事
213	明治27年	冬の部	炭がまや昔ながらの八瀬の奥	炭がま	人事
214	明治27年	冬の部	侍の臍あらはなる蒲團かな	蒲團	人事
215	明治27年	冬の部	紙衣着て京に歌よむ男あり	紙衣	人事
217	明治27年	冬の部	頭巾脱いて萬歳謠ふ翁かな	頭巾	人事
218	明治27年	冬の部	旗竿の一段高し冬木立	冬木	植物
219	明治27年	冬の部	うつくしや枯木の中の日の御旗	枯木	植物
220	明治27年	冬の部	裏町や干菜の軒の日のみ旗	干菜	人事
221	明治27年	冬の部	井戸端の大根白き寒さかな	寒さ	時候
222	明治27年	冬の部	角灯の谷中を通る寒さかな	寒さ	時候
223	明治27年	冬の部	竹揺れて湖上の星の寒さかな	寒さ	時候
224	明治27年	冬の部	霜やけの手を并べたる寺子哉	霜焼	人事
225	明治27年	冬の部	狼の水にかゞむや冬の月	冬の月	天文
226	明治27年	冬の部	冬の月鳥居をくゞる狂女哉	冬の月	天文
227	明治27年	冬の部	大比叡の雲脚はやし冬の月	冬の月	天文
228	明治27年	冬の部	車去て都大路の月さむし	寒月	天文
229	明治27年	冬の部	殿前の羽林の鋒や冬の月	冬の月	天文
230	明治27年	冬の部	寒月の廊下を通る局かな	寒月	天文
231	明治27年	冬の部	月さむし御講の堤牛車	寒月	天文
232	明治27年	冬の部	冬されの畑に出でたり狐の子	冬ざれ	時候

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
233	明治27年	冬の部	破巢の梢に高し冬の山	冬山	天文
234	明治27年	冬の部	鳥の糞巖に白し冬の山	冬山	天文
235	明治27年	冬の部	順礼の母に追ひつく枯野哉	枯野	天文
236	明治27年	冬の部	落葉して笥の音の細りゆく	落葉	植物
237	明治27年	冬の部	鐘樓の瓦古りにたり冬木立	冬木	植物
238	明治27年	冬の部	僧入定山茶花一枝こぼれける	山茶花	植物
239	明治27年	冬の部	山茶花のほろ / \ と散る伽藍かな	山茶花	植物
240	明治27年	冬の部	むさし野の尾花枯れたり月われたり	枯芒	植物
241	明治27年	冬の部	尾花枯れて月落る野の果もなし	枯芒	植物
242	明治27年	冬の部	舟去て古渡の枯芦暮れにける	枯蘆	植物
243	明治27年	冬の部	草枯れて土手の夕日の力なし	草枯	植物
244	明治27年	冬の部	からかきの縁に散らばる 苔屋哉	蛎	動物
245	明治27年	冬の部	月更けて水鳥もなし加茂川原	水鳥	動物
246	明治27年	冬の部	漣や岩に寄來るをしニツ	鴛鴦	動物
247	明治27年	冬の部	旭さすや鴛鴦眠る石の上	鴛鴦	動物
248	明治27年	冬の部	なく千鳥傾城伽羅をたく夕	千鳥	動物
249	明治27年	冬の部	餅蜜柑吹革祭の棚黒し	吹革祭	人事
250	明治27年	冬の部	火起して吹革祭の袴かな	吹革祭	人事
251	明治27年	冬の部	行列や東海道の枯柳	枯柳	植物
252	明治27年	冬の部	大師講背戸に女の声すなり	大師講	人事
253	明治27年	冬の部	風呂吹に一山の僧居並べり	風呂吹	人事
254	明治27年	冬の部	河豚汁や机の上の普門品	河豚汁	人事
255	明治27年	冬の部	河豚汁飽くまで喰ふ女かな	河豚汁	人事
256	明治27年	冬の部	経よむや河豚喰ふたる兒もあり	河豚	動物
257	明治27年	冬の部	入る月の沖に汐吹く鯨かな	鯨	動物
258	明治27年	冬の部	大鷹の明星睨む梢かな	鷹	動物
259	明治27年	冬の部	古曆木賃の宿に残りけり	古曆	人事
260	明治27年	冬の部	赤鬚の市に出でたり年のくれ	年の暮	時候
261	明治27年	冬の部	行年を尼ひとり泣く関の宿	行年	時候
262	明治27年	冬の部	宿かりて煤掃く旅の法師かな	煤拂	人事
263	明治27年	冬の部	瘦犬の何をあさるぞ冬の村	冬	時候
265	明治27年	冬の部	死馬を引出す冬の小村かな	冬	時候
266	明治27年	冬の部	煤掃に馬引出す小家かな	煤拂	人事
267	明治27年	冬の部	行年の馬士のさげたる何魚ぞ	行年	時候
400	明治28年	冬の部	散紅葉笥斜に水細し	散紅葉	植物
401	明治28年	冬の部	水青うして兩岸の紅葉散る	散紅葉	植物
402	明治28年	冬の部	凧の終日土手を打て鳴る	凧	天文
403	明治28年	冬の部	凧や湖上の星のきらめきぬ	凧	天文
404	明治28年	冬の部	狐火のしぐれ / \ て消ゆるなり	狐火	天文
405	明治28年	冬の部	垣朽ちて我紙衾あらはなる	衾	人事
406	明治28年	冬の部	頭巾もて塞いでも見たり壁の穴	頭巾	人事
407	明治28年	冬の部	宮柱太敷立て神の留主	神の旅	人事
408	明治28年	冬の部	古沓や又古沓や霜の朝	霜	天文
409	明治28年	冬の部	きら / \ と小春の杉の梢かな	小春	時候
411	明治28年	冬の部	君がため名所旧跡時雨せん	時雨	天文
413	明治28年	冬の部	羅漢達されども寒き夜をいかむ	寒さ	時候
414	明治28年	冬の部	小夜時雨そこ行く人や誰候	時雨	天文
415	明治28年	冬の部	羽をり / \ 鴨の羽たゝく音すなり	鴨	動物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
416	明治28年	冬の部	寒月を漕ぎ帰るなり渡守	寒月	天文
417	明治28年	冬の部	初冬の取敢へず酒を買ひにけり	初冬	時候
418	明治28年	冬の部	寺子らが手を並べたる火桶かな	火桶	人事
419	明治28年	冬の部	落葉さら / \ 僧は叩く月下の門	落葉	植物
420	明治28年	冬の部	夕風や伽藍の落葉吹きまくる	落葉	植物
421	明治28年	冬の部	石壇の落葉ふみ / \ 僧かへる	落葉	植物
422	明治28年	冬の部	君見よや簀の子の落葉朽ちもせん	落葉	植物
423	明治28年	冬の部	枯蔓の梢より吹落されぬ	枯蔓	植物
424	明治28年	冬の部	哀れ菊枯れたる中の花一ツ	枯菊	植物
425	明治28年	冬の部	達磨忌や塞いで見たる壁の穴	達磨忌	人事
426	明治28年	冬の部	達磨忌や夜更けてはらり壁の土	達磨忌	人事
427	明治28年	冬の部	冬枯や厠の屋根の鳥の糞	冬枯	植物
428	明治28年	冬の部	鉢叩轉べばひさご碎けなん	鉢叩	人事
429	明治28年	冬の部	鉢叩七十八と答へけり	鉢叩	人事
430	明治28年	冬の部	鉢叩たゝかで帰る時悲し	鉢叩	人事
431	明治28年	冬の部	そこ退けよ罷出でたり鉢叩	鉢叩	人事
432	明治28年	冬の部	更くる夜の瓦をすべる落葉かな	落葉	植物
433	明治28年	冬の部	つくねんと雑魚寝にもるゝ一人かな	雑魚寝	人事
434	明治28年	冬の部	あちら向きこちら向くなり年こもり	年籠	人事
435	明治28年	冬の部	年守夜せう事なしのともしかな	年籠	人事
436	明治28年	冬の部	大年の乳児這上る俵かな	大晦日	時候
437	明治28年	冬の部	人の家のいさかひやみて除夜の雨	除夜	時候
438	明治28年	冬の部	大晦日小判落した人の行く	大晦日	時候
439	明治28年	冬の部	小晦日いさゝか掃きぬ門の雪	小晦日	時候
440	明治28年	冬の部	春近き芥の上の芥かな	春近し	時候
441	明治28年	冬の部	寺男汝も春待つか立てある	春待	時候
442	明治28年	冬の部	油尽きて火消えて年流れたり	行年	時候
443	明治28年	冬の部	力なく年の梢を入る目かな	年の暮	時候
444	明治28年	冬の部	我年は下の五文字の名残かな	年の名残	時候
445	明治28年	冬の部	年一ト夜いさゝか惜しき思あり	除夜	時候
446	明治28年	冬の部	行年をうなる文よむ隣かな	行年	時候
447	明治28年	冬の部	年の暮偶々鳥が飛んでゆく	年の暮	時候
448	明治28年	冬の部	掛取に狩野の一軸を説き明かす	掛乞	人事
449	明治28年	冬の部	二三人侍衆の年わすれ	年忘	人事
450	明治28年	冬の部	二三人何を語りて年忘	年忘	人事
451	明治28年	冬の部	面白や權兵衛が宿の宵飾	門松立つ	人事
453	明治28年	冬の部	折しも時雨盗人何処を駆抜くらむ	時雨	天文
871	明治29年	冬の部	大根の引残されて拔出でたり	大根	植物
872	明治29年	冬の部	骨鳴るべく木枯の不動立ってある	凧	天文
873	明治29年	冬の部	凧の海を渡りて鞅鞅へ	凧	天文
874	明治29年	冬の部	雲黄なり江北一帯冬枯れつ	冬枯	植物
875	明治29年	冬の部	行くこと十歩にして野は枯れ天空し	枯野	天文
876	明治29年	冬の部	枯野行き尽くる處のほとり海を見る	枯野	天文
877	明治29年	冬の部	氷月夜天未黒き北氷洋	氷	天文
878	明治29年	冬の部	人も居らず鉢植の菊枯れてあり	枯菊	植物
879	明治29年	冬の部	縁先や根こぎにしたる菊枯れつ	枯菊	植物
880	明治29年	冬の部	掃溜や枯れたる中の菊の葉青み	枯菊	植物
881	明治29年	冬の部	枯菊の半刈られて半あり	枯菊	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
882	明治29年	冬の部	病む菊の此夕暮を枯れにける	枯菊	植物
883	明治29年	冬の部	菊枯れて荷馬引込む畑かな	枯菊	植物
884	明治29年	冬の部	畑中や菊二三本枯れて立つ	枯菊	植物
885	明治29年	冬の部	墓原菊も何も枯れて夕嵐	枯菊	植物
886	明治29年	冬の部	枯れたるをばたばねあげたり菊畑	枯菊	植物
887	明治29年	冬の部	菊枯れて下駄痕多き畑かな	枯菊	植物
888	明治29年	冬の部	一束の枯れし菊たよふ野川かな	枯菊	植物
889	明治29年	冬の部	墓守の枯菊を焚くべく積上げつ	枯菊	植物
890	明治29年	冬の部	原中に人を賣るなり冬の月	冬の月	天文
891	明治29年	冬の部	冬枯の城南は半ば城北は皆	冬枯	植物
892	明治29年	冬の部	凧や折れて飛散る桑の枝	凧	天文
893	明治29年	冬の部	畑中や桑冬枯れて風白く	冬枯	植物
894	明治29年	冬の部	凧の山川蒼々茫々と	凧	天文
895	明治29年	冬の部	葬かあらぬか白旗ばかり枯野くる	枯野	天文
896	明治29年	冬の部	家五六を北に見て行く枯野かな	枯野	天文
897	明治29年	冬の部	里あり家五六にして更に枯野かな	枯野	天文
898	明治29年	冬の部	握飯喰て疝氣起すべく野は枯れぬ	枯野	天文
899	明治29年	冬の部	野は枯れて小さき赤い鳥居見えつ	枯野	天文
900	明治29年	冬の部	物も云はで枯野を通る主従かな	枯野	天文
901	明治29年	冬の部	ところ／＼石ころ高き枯野かな	枯野	天文
902	明治29年	冬の部	枯野ゆけば真紅の紐の落ちてあり	枯野	天文
903	明治29年	冬の部	鶏の畔傳ひ行く小春かな	小春	時候
904	明治29年	冬の部	小春日や網干してある磯つづき	小春	時候
905	明治29年	冬の部	しぐるゝや鴉がとまる濡標	時雨	天文
906	明治29年	冬の部	汨羅あたり三閭の太夫しぐれける	時雨	天文
907	明治29年	冬の部	谷底の灯火一つしぐれける	時雨	天文
908	明治29年	冬の部	霜の陣此の夜周瑜死すと傳ふ	霜	天文
909	明治29年	冬の部	詔を階下に受くる霜夜かな	霜夜	時候
910	明治29年	冬の部	満天の雪に楚江を渡るかな	雪	天文
911	明治29年	冬の部	呉か越か雪の曙島も見えず	雪	天文
912	明治29年	冬の部	駅路や雪のあけぼの鈴の音	雪	天文
913	明治29年	冬の部	雪のあした紫の上光る君	雪	天文
914	明治29年	冬の部	天幕に李陵泣くなり冬の月	冬の月	天文
915	明治29年	冬の部	曉に匈奴出でたり雪の丘	雪	天文
916	明治29年	冬の部	營に火して單于逃げたり冬の月	冬の月	天文
917	明治29年	冬の部	寒月に将士皆泣く遺詔かな	寒月	天文
918	明治29年	冬の部	切支丹のがらすの窓や冬の月	冬の月	天文
919	明治29年	冬の部	寒月の大鋸や木挽小屋	寒月	天文
920	明治29年	冬の部	寒月の首桶并ぶ野陣かな	寒月	天文
921	明治29年	冬の部	牢内の錠音高き寒さかな	寒さ	時候
922	明治29年	冬の部	首枷に流罪の人の寒さかな	寒さ	時候
923	明治29年	冬の部	首桶の首のがたつく寒さかな	寒さ	時候
924	明治29年	冬の部	鐘樓古く一山の木葉落尽す	落葉	植物
925	明治29年	冬の部	落葉の白帝城上鴉啼く	落葉	植物
926	明治29年	冬の部	木枯や呉江に艤する三千艘	凧	天文
927	明治29年	冬の部	枯芦や石碣村の家五六	枯蘆	植物
928	明治29年	冬の部	一村は干菜つる軒日午なり	干菜	人事
929	明治29年	冬の部	苞に居てなまこ何をか夢むらん	海鼠	動物

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
930	明治29年	冬の部	東の方海に入てなまこを見たりける	海鼠	動物
931	明治29年	冬の部	覇業未だ成らずなまこに恨あり	海鼠	動物
932	明治29年	冬の部	なまことは王者の道かそも覇者か	海鼠	動物
933	明治29年	冬の部	暁天に納豆打つなり媪が茶屋	納豆	人事
934	明治29年	冬の部	櫓の火や木曾の冠者の幼き	櫓	人事
935	明治29年	冬の部	櫓の火に六韜をよむ男かな	櫓	人事
936	明治29年	冬の部	櫓の火や南朝の遺臣姓は和田	櫓	人事
937	明治29年	冬の部	板額の何やら縫へる櫓火かな	櫓	人事
938	明治29年	冬の部	炭ついでしばしもくねんとしたりける	炭	人事
939	明治29年	冬の部	はり / \ と何やはねる炭火かな	炭	人事
940	明治29年	冬の部	薄衾かぶりつ / \ 苦吟かな	衾	人事
941	明治29年	冬の部	足が出て詮方もなきふとんかな	蒲團	人事
942	明治29年	冬の部	物思ひ居ればたんぼのさめやすき	湯たんぼ	人事
943	明治29年	冬の部	一人寝てたんぼさめたる夜半かな	湯たんぼ	人事
944	明治29年	冬の部	俳諧や炬燵もなく二人ゐる	炬燵	人事
945	明治29年	冬の部	あるは詩書あるは礼樂冬籠	冬籠	人事
946	明治29年	冬の部	更くる夜の裾野のあたり里かぐら	神樂	人事
947	明治29年	冬の部	鉢叩とは謠曲の名なるべく	鉢叩	人事
948	明治29年	冬の部	雪丸げ二つに割れし恨かな	雪遊び	人事
949	明治29年	冬の部	起きて見ればひとり月下の雪佛	雪達磨	人事
950	明治29年	冬の部	後向いて入定したり雪佛	雪達磨	人事
951	明治29年	冬の部	雪佛に簞笠きせて笑ひける	雪達磨	人事
952	明治29年	冬の部	案山子にも似て哀れなり雪佛	雪達磨	人事
953	明治29年	冬の部	胡兒驕る塞上塞下の吹雪かな	吹雪	天文
954	明治29年	冬の部	士卒五千匈奴に降る吹雪哉	吹雪	天文
955	明治29年	冬の部	勅をきいて一軍振ふあられかな	霰	天文
956	明治29年	冬の部	早打の輿に打込む霰かな	霰	天文
957	明治29年	冬の部	徳利もてば霰はね返る野道かな	霰	天文
958	明治29年	冬の部	江を渡り中流にして霰かな	霰	天文
959	明治29年	冬の部	瀧壺に氷柱見上るあしたかな	垂氷	天文
960	明治29年	冬の部	尼若くつらゝを折て棄てにける	垂氷	天文
961	明治29年	冬の部	染物の紫も朱もつらゝかな	垂氷	天文
962	明治29年	冬の部	有明や田毎 / \ のうす氷	薄氷	地理
963	明治29年	冬の部	紅といた皿の中なる氷かな	氷	天文
964	明治29年	冬の部	薄氷に紅こぼしたる女かな	薄氷	地理
965	明治29年	冬の部	張りつめし氷の中の巖かな	氷	天文
966	明治29年	冬の部	鷹の子や越の海岸岩多き	鷹	動物
967	明治29年	冬の部	たか狩や日暮れて帰る左賢王	鷹狩	人事
968	明治29年	冬の部	乾坤は正に五更の氷かな	氷	天文
969	明治29年	冬の部	君に侑む世に乾鮭もまた風流	乾鮭	人事
970	明治29年	冬の部	よき人の笑ませ給ふや薬くひ	薬喰	人事
971	明治29年	冬の部	薬喰頻りに客にすゝめける	薬喰	人事
972	明治29年	冬の部	薬喰を見てゐる妻の美しくしき	薬喰	人事
973	明治29年	冬の部	薬喰すべく火を焚く古廟かな	薬喰	人事
974	明治29年	冬の部	薬には狸なんどもよかるべく	狸	動物
975	明治29年	冬の部	狸なんど下司の喰ふべきものなるぞ	狸	動物
976	明治29年	冬の部	薬喰ひて大の字に寐たる男哉	薬喰	人事
977	明治29年	冬の部	麾下の士が公の愛馬を薬喰ひ	薬喰	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
978	明治29年	冬の部	薬喰ふて鍋かぶりたる法師かな	薬喰	人事
979	明治29年	冬の部	あかざりに墨つけて見る寺子かな	靱	人事
980	明治29年	冬の部	水鼻やひとり遺文をよむ灯下	水鼻	人事
981	明治29年	冬の部	雪沓や幼きものは主なるべく	雪沓	人事
982	明治29年	冬の部	鷺直に雪車乗下ろす谷間哉	雪舟	人事
983	明治29年	冬の部	師走八日雪ふれば寒き日なりける	師走	時候
984	明治29年	冬の部	寒垢離や入れずみしたる大男	寒垢離	人事
985	明治29年	冬の部	月西へ寒念佛の鉦遠くなり	寒念佛	人事
986	明治29年	冬の部	あれ聞けよ宿るべき村の寒念佛	寒念佛	人事
987	明治29年	冬の部	肉さげて魯智深なるべく寒ね佛	寒念佛	人事
988	明治29年	冬の部	豆打て何やら唱ふひとりもの	豆まき	人事
989	明治29年	冬の部	煤掃かんと大黒抱く男かな	煤拂	人事
990	明治29年	冬の部	掃けど / \ 不動御像煤びたる	煤拂	人事
991	明治29年	冬の部	せんなしや乳児這出づる煤掃ひ	煤拂	人事
992	明治29年	冬の部	煤掃に軍歌を唱ふ隣の子	煤拂	人事
993	明治29年	冬の部	煤掃に如來の腕の欠けが出る	煤拂	人事
994	明治29年	冬の部	京の六右エ門殿とやら節季候	節季	時候
995	明治29年	冬の部	此あたりに隠れもない節季候にて候	節季	時候
996	明治29年	冬の部	年の市に組板叩く男かな	年の市	人事
997	明治29年	冬の部	立て話す京の男や年の市	年の市	人事
998	明治29年	冬の部	うき人の古曆見て居たりける	古曆	人事
999	明治29年	冬の部	寄合ふて年忘する木賃かな	年忘	人事
1000	明治29年	冬の部	鶏啼いて師走とも見えぬ小村かな	師走	時候
1001	明治29年	冬の部	二三疋師走の村の犬吠えぬ	師走	時候
1002	明治29年	冬の部	年の暮劉備筵を織て居る	年の暮	時候
1003	明治29年	冬の部	行年に何の書をよむ子房ぞも	行年	時候
1004	明治29年	冬の部	狐落す咒文高らかに年の暮	年の暮	時候
1005	明治29年	冬の部	臘八や里に啼く日は里鴉	臘八	人事
1006	明治29年	冬の部	餅の村にわが宿るべき村もなし	餅	人事
10650	明治29年	冬の部	鉢植の菊枯れて縁にころがりぬ	菊枯れ	植物
1627	明治30年	冬の部	湯婆温めて母にまゐらす看護哉	湯たんぼ	人事
1628	明治30年	冬の部	蒲團重くしはぶき苦し夜中頃	蒲團	人事
1629	明治30年	冬の部	薬より更に湯婆を愛すかな	湯たんぼ	人事
1630	明治30年	冬の部	病む母に配られし衣見せ申す	衣配	人事
1631	明治30年	冬の部	市に住んで医者に閑あり年の暮	年の暮	時候
1632	明治30年	冬の部	一村に疫あり餅の音もなし	餅	人事
1633	明治30年	冬の部	雑魚寐して風を引いたる男かな	雑魚寝	人事
1634	明治30年	冬の部	煤掃にはき出されたる病者かな	煤拂	人事
1635	明治30年	冬の部	仇は獲ず従者は病みぬ年のくれ	年の暮	時候
1636	明治30年	冬の部	神の留守病を呪ふすべをなみ	神の旅	人事
1637	明治30年	冬の部	我に疝氣炉を開くこと早かりし	爐開	人事
1638	明治30年	冬の部	時雨小集あるじの病を慰めつ	時雨	天文
1639	明治30年	冬の部	遂に起たず夜半風遠く鳴る	凧	天文
1640	明治30年	冬の部	病癒えて未だ枯れざる菊を見る	菊	植物
1641	明治30年	冬の部	山茶花や年若き僧心をやむ	山茶花	植物
1642	明治30年	冬の部	寒に中り越路に逗留すと文す	寒さ	時候
1643	明治30年	冬の部	二人まで疫に死したり年のくれ	年の暮	時候
1644	明治30年	冬の部	湯治場に冬籠しつ京の人	冬籠	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1645	明治30年	冬の部	霜の陣夜もすがら金創の痛み哉	霜	天文
1646	明治30年	冬の部	風呂吹に病みたる僧の列なりし	風呂吹	人事
1647	明治30年	冬の部	只納豆汁の温きが薬なり	納豆汁	人事
1648	明治30年	冬の部	千鳥きく我に戀あり病あり	千鳥	動物
1649	明治30年	冬の部	戀に病める海鼠もあらむ苞の中	海鼠	動物
1650	明治30年	冬の部	疫の家に豆打つ声の聞ゆなり	豆まき	人事
1651	明治30年	冬の部	ひとりものゝ病むで四五人年ごもり	年籠	人事
1652	明治30年	冬の部	旅に病むで暦の末を恨むかな	古暦	人事
1653	明治30年	冬の部	懸乞の骨折きたる群集かな	掛乞	人事
1654	明治30年	冬の部	凧に金創の薬を賣つてゐる	凧	天文
1655	明治30年	冬の部	病床に冬の夕日のすこしさす	冬	時候
1656	明治30年	冬の部	病院の窓に物干す小春哉	小春	時候
1657	明治30年	冬の部	小盗人の病むで粥喰ふ櫓火かな	櫓	人事
1658	明治30年	冬の部	捕はれて盗の婦となりつ薬喰	薬喰	人事
1659	明治30年	冬の部	玄関に火鉢を遠み薬取	火鉢	人事
1660	明治30年	冬の部	急病や十夜の戻りさはがしき	十夜	人事
1661	明治30年	冬の部	外科室に器械并べる寒さ哉	寒さ	時候
1662	明治30年	冬の部	薬喰すべく約成る木賃かな	薬喰	人事
1663	明治30年	冬の部	傷寒を醫者の争ふ師走哉	師走	時候
1665	明治30年	冬の部	一家中足袋はくことを許されず	足袋	人事
1666	明治30年	冬の部	草庵や時雨吹込む翁の像	時雨	天文
1668	明治30年	冬の部	朝の程西にたまりし落葉哉	落葉	植物
1669	明治30年	冬の部	岨下に落葉吹込む薄暗し	落葉	植物
1670	明治30年	冬の部	曉に落葉の森を流人かな	落葉	植物
1671	明治30年	冬の部	暮れんとして落葉が岡の風急なり	落葉	植物
1672	明治30年	冬の部	庭前の落葉を掃くや翁ぶり	落葉	植物
1673	明治30年	冬の部	松原に何の落葉か吹たまる	落葉	植物
1674	明治30年	冬の部	落葉踏んで行けば頻りに猿が鳴く	落葉	植物
1675	明治30年	冬の部	草鞋軽々落葉が上を踏み心	落葉	植物
1676	明治30年	冬の部	林中の落葉をふんで夜帰る	落葉	植物
1677	明治30年	冬の部	主従の落葉焚きつくる知らぬ山	落葉	植物
1679	明治30年	冬の部	正面の坐ふとんばかり明いてゐる	蒲團	人事
1680	明治30年	冬の部	一枚のふとんかぶりし二人かな	蒲團	人事
1681	明治30年	冬の部	贈られし蒲團絹にして薄かりし	蒲團	人事
1682	明治30年	冬の部	温くもりの少し残りしふとん哉	蒲團	人事
1683	明治30年	冬の部	唐艸のふとん積上げし車かな	蒲團	人事
1684	明治30年	冬の部	かつぎ入るゝ蒲團にせまき戸口かな	蒲團	人事
1685	明治30年	冬の部	ふとん足らず其角坐に入る胡坐かな	蒲團	人事
1686	明治30年	冬の部	ふとん着てしばしが程はうずくまる	蒲團	人事
1687	明治30年	冬の部	一人寐てふとん廣きを愛すかな	蒲團	人事
1688	明治30年	冬の部	抜け出でしふとんの穴に再びす	蒲團	人事
1689	明治30年	冬の部	買はまくす蒲團の幅のやゝせまき	蒲團	人事
1690	明治30年	冬の部	他国人と年忘する湯治かな	年忘	人事
1692	明治30年	冬の部	石壇の下にたまりし落葉かな	落葉	植物
1693	明治30年	冬の部	人も來ず落葉たまりし低き縁	落葉	植物
1694	明治30年	冬の部	落葉かく弥宜が娘の年ふけし	落葉	植物
1695	明治30年	冬の部	岡の上に落葉焚き居る畑かな	落葉	植物
1696	明治30年	冬の部	うす黒く水田にたまる落葉かな	落葉	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1697	明治30年	冬の部	いつのまにか何の落葉ともわかぬかな	落葉	植物
1699	明治30年	冬の部	棒鱈の乾さけ妬む愚かな	鱈	雑
1700	明治30年	冬の部	乾鮭にかんてらの烟吹きつける	乾鮭	人事
1701	明治30年	冬の部	仕官してからさけを得つ年のくれ	年の暮	時候
1702	明治30年	冬の部	この師走乾鮭十駄市に入る	師走	時候
1703	明治30年	冬の部	二三子のからさけ割いて夜半亭	乾鮭	人事
1704	明治30年	冬の部	からさけを厨下に割ける素振あり	乾鮭	人事
1705	明治30年	冬の部	俳諧や遂にからさけに酒をおく	乾鮭	人事
1706	明治30年	冬の部	店先の乾鮭に喝す貧道心	乾鮭	人事
1707	明治30年	冬の部	からさけのいとからびたるをめづるかな	乾鮭	人事
1708	明治30年	冬の部	夜遅く乾鮭に飯喰ふ一人かな	乾鮭	人事
1709	明治30年	冬の部	他国にして人からさけをなつかしむ	乾鮭	人事
1710	明治30年	冬の部	村夫子素よりからさけを愛すあり	乾鮭	人事
1712	明治30年	冬の部	乗合の頭巾まぶかき女かな	頭巾	人事
1713	明治30年	冬の部	暗がりをちらと怪しきづきん哉	頭巾	人事
1714	明治30年	冬の部	人に嫁してづきんの色に好みあり	頭巾	人事
1715	明治30年	冬の部	二人立つづきんながら物語	頭巾	人事
1716	明治30年	冬の部	古びたる頭巾あはれむ白髪哉	頭巾	人事
1717	明治30年	冬の部	只古びたるづきんにして人は亡し	頭巾	人事
1718	明治30年	冬の部	今やうのづきんかぶりし知らぬ人	頭巾	人事
1719	明治30年	冬の部	連立て朝鮮人のづきんかな	頭巾	人事
1720	明治30年	冬の部	給はりしづきんの色のさめもせず	頭巾	人事
1721	明治30年	冬の部	取りはづしづきんあはれぬ故人かな	頭巾	人事
1722	明治30年	冬の部	人老いてづきんことやうなるを着る	頭巾	人事
1723	明治30年	冬の部	相別るゝこと十年づきんなつかしき	頭巾	人事
1724	明治30年	冬の部	さし出でゝづきん見にくき男かな	頭巾	人事
1726	明治30年	冬の部	曾れらしきづきんを着たる人もなし	頭巾	人事
1728	明治30年	冬の部	佛のづきん目につくゆがみかな	頭巾	人事
1730	明治30年	冬の部	あのやうにづきんの曲がむ人なりし	頭巾	人事
1732	明治30年	冬の部	押入に乾さけ藏す易者かな	乾鮭	人事
1733	明治30年	冬の部	髭なきが師走の市にトを賣る	師走	時候
1734	明治30年	冬の部	かみくらに易者据ゑたる十夜哉	十夜	人事
1735	明治30年	冬の部	行き逢ひし醫者と易者のづきん哉	頭巾	人事
1736	明治30年	冬の部	白鹿を見たりト者を訪ふ道に	鹿	動物
1737	明治30年	冬の部	醫者ト者日向に對す冬至かな	冬至	時候
1738	明治30年	冬の部	日南す易者が門の帰花	歸り花	植物
1739	明治30年	冬の部	トを賣る門にあやしき木實哉	木の實	植物
1740	明治30年	冬の部	医ト對坐して冬至の目があたる	冬至	時候
1741	明治30年	冬の部	落葉さつと賣ト先生吹かれ兒	落葉	植物
1742	明治30年	冬の部	今猶在り银杏落葉して賣ト郎	落葉	植物
1743	明治30年	冬の部	諸木落ちてト者社頭を去る夕	落葉	植物
1744	明治30年	冬の部	落葉して賣トの床几移したる	落葉	植物
1745	明治30年	冬の部	賣トの床几移しゝ小春かな	小春	時候
1746	明治30年	冬の部	トを賣り居れば银杏の落葉かな	落葉	植物
1747	明治30年	冬の部	大道や理髮師に隣る賣ト師	雑	雑
1748	明治30年	冬の部	賣ト師を中に银杏の落葉かな	落葉	植物
1749	明治30年	冬の部	トして吉鱸釣らんと出でゝ行く	鱸	動物
1750	明治30年	冬の部	行年を貧にしてト吉なりし	行年	時候

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1751	明治30年	冬の部	笠竹に霰落來る社頭かな	霰	天文
1752	明治30年	冬の部	冬枯のト者小家す土手の下	冬枯	植物
1753	明治30年	冬の部	冬枯や賣トの旗に日が當る	冬枯	植物
1755	明治30年	冬の部	藥喰到れば少し後れたる	藥喰	人事
1756	明治30年	冬の部	聴法の人さまノに凍えたる	凍る	天文
1757	明治30年	冬の部	狐落ちて銀杏の落葉握り居る	落葉	植物
1758	明治30年	冬の部	梁に狂女笑へり冬の月	冬の月	天文
1760	明治30年	冬の部	冬籠るべくとして南向きなるよ	冬籠	人事
1761	明治30年	冬の部	枯葛の恨みんよしもあらぬ戀	枯葛	植物
1762	明治30年	冬の部	麦蒔くべく日和嬉しき朝出かな	麦蒔	人事
1763	明治30年	冬の部	家に物の古曆なんど申すなき	古曆	人事
1764	明治30年	冬の部	きれノや冬田をはしる雲の影	冬田	天文
1765	明治30年	冬の部	炭小屋に炭なくて冬の月がさす	雑	雑
1767	明治30年	冬の部	煤掃かんとちよと移したり鉢の梅	煤拂	人事
1768	明治30年	冬の部	煤掃の寒梅庭の彼方かな	煤拂	人事
1769	明治30年	冬の部	煤掃に箆を叩く夫婦かな	煤拂	人事
1770	明治30年	冬の部	憤ふらく煤なんど掃いて何かせん	煤拂	人事
1771	明治30年	冬の部	すゝはきに土器碎き発心す	煤拂	人事
1772	明治30年	冬の部	大黒の煤びたるを掃き奉る	煤拂	人事
1773	明治30年	冬の部	一ト處掃き残したる煤悲し	煤拂	人事
1774	明治30年	冬の部	煤掃に什器こわしゝ婢を罪す	煤拂	人事
1775	明治30年	冬の部	煤掃に嵐吹き込む一トしきり	煤拂	人事
1776	明治30年	冬の部	煤掃やせんすべ知らぬひとりもの	煤拂	人事
1777	明治30年	冬の部	神の子の不具なるはこの海鼠哉	海鼠	動物
1778	明治30年	冬の部	浦の昔海鼠化けたる嘶かな	海鼠	動物
1779	明治30年	冬の部	魚河岸に出會ふ他国の海鼠哉	海鼠	動物
1781	明治30年	冬の部	道にして湯婆さめなんこと悲し	湯たんぼ	人事
1782	明治30年	冬の部	おくるべく君に湯婆を温めし	湯たんぼ	人事
1783	明治30年	冬の部	獵犬の面もふらず霰かな	霰	天文
1784	明治30年	冬の部	雪の夜や犬くゝとなく庫裡の方	雪	天文
1785	明治30年	冬の部	獵犬の門守るべく老いしかな	狩	人事
1787	明治30年	冬の部	冬ごもり後ろに近きえぞが鳶	冬籠	人事
1789	明治30年	冬の部	蕪引大根引とは異にして	雑	雑
1791	明治30年	冬の部	梅一枝早きに過ぎし年の暮	年の暮	時候
1792	明治30年	冬の部	風呂吹の味噌を分つや年忘れ	年忘	人事
1794	明治30年	冬の部	沖の方時に鳴動す年の暮	年の暮	時候
1796	明治30年	冬の部	富士少し見ゆる嬉しき冬籠	冬籠	人事
1798	明治30年	冬の部	戦さやんでありなれの水臙ろなり	臙	天文
1800	明治30年	冬の部	戀十五十八椰子の月涼し	涼し	時候
1802	明治30年	冬の部	耶蘇の墓に四月の花の赤きかな	四月	時候
1804	明治30年	冬の部	菩提樹下昼寐さめたる男かな	晝寝	人事
1806	明治30年	冬の部	雁をきく萬里長城以北かな	雁	動物
1808	明治30年	冬の部	凧の鐵笛鳴て日は暮れぬ	凧	天文
1810	明治30年	冬の部	鯛と申す魚なり冬籠	冬籠	人事
1846	明治31年	冬の部	寐ぬる頃少し残りし炭火かな	炭	人事
1847	明治31年	冬の部	籠もりて炭の粉少しこぼれける	炭	人事
1848	明治31年	冬の部	炭小屋に吹雪積りし隙間哉	炭	人事
1849	明治31年	冬の部	ぬかるみに炭俵埋む戸口哉	炭俵	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1850	明治31年	冬の部	戸を推せば嵐吹込む炭火哉	炭	人事
1851	明治31年	冬の部	青白く炭小屋焼けし焰かな	炭	人事
1852	明治31年	冬の部	客去て炭火徒らに熾なる	炭	人事
1853	明治31年	冬の部	日雇の地に炭火して朝寒き	朝寒	時候
1854	明治31年	冬の部	三伏に鉄を鍛ゆる炭火かな	三伏	時候
1855	明治31年	冬の部	炭とりの底はたきけり梅の花	梅	植物
1856	明治31年	冬の部	壇上に咒文荒く壇下に炭火さかん	炭	人事
1857	明治31年	冬の部	焼跡の炭火となりし夜明かな	炭	人事
1858	明治31年	冬の部	活火炉上更に一簣の炭を投ず	炭	人事
1859	明治31年	冬の部	客もなき診断の間の炭火かな	炭	人事
1860	明治31年	冬の部	小屋の前の粉炭に霰散乱す	霰	天文
1861	明治31年	冬の部	搔きまはし搔きまはせども炭火なし	炭	人事
1862	明治31年	冬の部	吹き止めバ次第に消ゆる炭火かな	炭	人事
1863	明治31年	冬の部	それ鷹の虚空をつかむ怒かな	鷹	動物
1864	明治31年	冬の部	王若く鷹を好みてしばしす	鷹	動物
1865	明治31年	冬の部	寒むがるを抱きすくめつゝ湯に入れし	寒さ	時候
1866	明治31年	冬の部	湯屋を出てちょこし走りさむき風	寒さ	時候
1867	明治31年	冬の部	湖南より湖北に達す氷かな	氷	天文
1868	明治31年	冬の部	明方の氷屢々響あり	氷	天文
1869	明治31年	冬の部	大根の引くべかりしを盗まれし	大根	植物
1870	明治31年	冬の部	うき人の引きわづらへる大根哉	大根	植物
1872	明治31年	冬の部	宰相を罵て時雨の山に入る	時雨	天文
1873	明治31年	冬の部	頭巾着て逢恋すべく羞かしき	頭巾	人事
1875	明治31年	冬の部	吾が頭巾人の頭巾に似て非なり	頭巾	人事
1877	明治31年	冬の部	吾が頭巾浮世のさまに似ずもがな	頭巾	人事
1878	明治31年	冬の部	水樓や千鳥月夜を郎かへる	千鳥	動物
1879	明治31年	冬の部	客を留め鳴かぬ千鳥や茶の烟	千鳥	動物
1880	明治31年	冬の部	川隈の闇に鳴きゆく千鳥かな	千鳥	動物
1881	明治31年	冬の部	小夜千鳥博多小女郎浪枕	千鳥	動物
1882	明治31年	冬の部	水に沈む廻廊の灯や鳴千鳥	千鳥	動物
1883	明治31年	冬の部	千鳥きいて泣く人もあらむ今時分	千鳥	動物
1884	明治31年	冬の部	千鳥も見えず夜の霜ふる川原哉	千鳥	動物
1885	明治31年	冬の部	川尻や丑満近く千鳥鳴く	千鳥	動物
1886	明治31年	冬の部	わかき男女とはしる千鳥鳴く	千鳥	動物
1887	明治31年	冬の部	陣門に犬吠ゆ冬の月三更	冬の月	天文
1888	明治31年	冬の部	賞もあらず鷹を見てゐる犬愚也	鷹	動物
1889	明治31年	冬の部	群犬やいくさの跡の冬の月	冬の月	天文
1890	明治31年	冬の部	杵兵衛が麦ま支にゆけば犬も行く	麦蒔	人事
1891	明治31年	冬の部	鬨犬や街道の雪に血を印す	雪	天文
1892	明治31年	冬の部	老いし犬の寒夜の門をまもり居る	寒夜	時候
1894	明治31年	冬の部	鶏の尾の雫となりしみぞれかな	雫	天文
1895	明治31年	冬の部	音もなくみぞれふるなり杉木立	雫	天文
1896	明治31年	冬の部	帆重くみぞれとなりし船出かな	雫	天文
1897	明治31年	冬の部	山腹はみぞれにして山麓は雨	雫	天文
1898	明治31年	冬の部	みぞれしばししたゝかの雨となりけるよ	雫	天文
1899	明治31年	冬の部	乗合の合羽の上のみぞれかな	雫	天文
1900	明治31年	冬の部	雨かあらず雪かあらず乃ち雫かな	雫	天文
1901	明治31年	冬の部	塀側をみぞれ吹いて寒菊わなゝきぬ	雫	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
1902	明治31年	冬の部	みぞれ一ト日ふみ切らしたる草鞋かな	霰	天文
1903	明治31年	冬の部	寒き日のみぞれにして暮れにけり	霰	天文
1904	明治31年	冬の部	鞍壺に霰を拂ふ合羽かな	霰	天文
1905	明治31年	冬の部	傘を傾けつみぞれを滑べらかす	霰	天文
1906	明治31年	冬の部	杉の葉のみぞれ解けずして氷りけり	霰	天文
1907	明治31年	冬の部	生垣にみぞるゝ音す夫帰る	霰	天文
1908	明治31年	冬の部	寄席を出て風斜なる霰かな	霰	天文
1910	明治31年	冬の部	七十年身に病なし冬ごもり	冬籠	人事
1911	明治31年	冬の部	貢献の白象寒に病むで死す	寒	時候
1912	明治31年	冬の部	卷帙乱れ散て水仙花咲きぬ	水仙	植物
1913	明治31年	冬の部	虫の氣の姫に冊つき夜の長き	夜長	時候
1914	明治31年	冬の部	かりそめの風の心地を秋の行く	行秋	時候
1915	明治31年	冬の部	玉欄に病む目眩ゆき牡丹哉	牡丹	植物
1916	明治31年	冬の部	病むちごの屢魔はれつ明やすき	短夜	時候
1917	明治31年	冬の部	蹇の蚊帳より縁に這出でし	蚊帳	人事
1918	明治31年	冬の部	蚤に蚊に物狂はしき病かな	雑	雑
1919	明治31年	冬の部	蚊柱や疫の小村の鉦の音	蚊	動物
1920	明治31年	冬の部	病眼に梅猶寒き社前哉	梅	植物
1921	明治31年	冬の部	梅咲くや痘ありぬべく赤き注連	梅	植物
1922	明治31年	冬の部	人病むで吟骨梅の如く瘦す	梅	植物
1923	明治31年	冬の部	戀すべく蹇の猫あはれな里	猫の戀	動物
2463	明治31年	冬の部	故里ははや初冬の庭さびし	初冬	時候
2465	明治31年	冬の部	野の店の葱畑や朝の月	葱	植物
2466	明治31年	冬の部	俎板や葱に月さす臺所	葱	植物
2467	明治31年	冬の部	黒土や葱掘る背戸の霜柱	雑	雑
2468	明治31年	冬の部	庖丁やさつと迸る葱の香	葱	植物
2469	明治31年	冬の部	市に買ひし一抱の葱の長短	葱	植物
2470	明治31年	冬の部	清流に葱長きを洗ひけり	葱	植物
2471	明治31年	冬の部	葱の香やあつものを吹く卓の上	葱	植物
2472	明治31年	冬の部	葱味噌の小皿や朝の飯あつし	葱	植物
2473	明治31年	冬の部	行灯やひとりト者の葱を煮る	葱	植物
2474	明治31年	冬の部	ひともじの葎さを厭ふ女か那	葱	植物
2475	明治31年	冬の部	朝川に葱の屑を流しけり	葱	植物
2476	明治31年	冬の部	葱さげて貧乏町や星明り	葱	植物
2477	明治31年	冬の部	撰りわけて葱水仙に似たるか那	葱	植物
2478	明治31年	冬の部	大根といつれか白き葱か那	雑	雑
2479	明治31年	冬の部	居酒屋の葱かんばしく酔多し	葱	植物
2480	明治31年	冬の部	大江に葱を洗ふ舟の月	葱	植物
2481	明治31年	冬の部	塊や青きが長き葱畑	葱	植物
2482	明治31年	冬の部	葱さがす厨の偶や干からびし	葱	植物
2483	明治31年	冬の部	旭のすくや木立に隣る葱畑	葱	植物
2484	明治31年	冬の部	洗はざる葱買ふて山に帰る哉	葱	植物
2486	明治31年	冬の部	煮凍や日脚さし込む舟の窓	煮凝	人事
2487	明治31年	冬の部	いさゝかの煮凍さがす灯か那	煮凝	人事
2488	明治31年	冬の部	煮凍の豆腐をさびと申すべく	煮凝	人事
2489	明治31年	冬の部	煮凍の豆腐かみたる単か那	煮凝	人事
2490	明治31年	冬の部	煮凍の小鍋温む炭貧し	煮凝	人事
2491	明治31年	冬の部	二三子や煮凍わかつ熱の朝	煮凝	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2492	明治31年	冬の部	煮凍の豆腐俳諧の小酒もり	煮凝	人事
2493	明治31年	冬の部	煮凍の鍋の火を吹く妻もなし	煮凝	人事
2494	明治31年	冬の部	片偶や煮凍の鍋物うくて	煮凝	人事
2495	明治31年	冬の部	兀として煮凍とかす土鍋か那	煮凝	人事
2496	明治31年	冬の部	汁うすく煮凍の葱白し	煮凝	人事
2497	明治31年	冬の部	粟飯に煮凍の狸をすゝめけり	煮凝	人事
2498	明治31年	冬の部	煮凍や物かぶせたる河豚鍋	煮凝	人事
2499	明治31年	冬の部	煮凍の狸なんどや火のいぶる	煮凝	人事
2500	明治31年	冬の部	煮凍の肉喰ひ去る盗人か那	煮凝	人事
2501	明治31年	冬の部	煮凍の熊のしゝむら火明か	煮凝	人事
2503	明治31年	冬の部	浦島が子も来合はして夷講	夷講	人事
2504	明治31年	冬の部	裏町は菖菟賣りや夷講	夷講	人事
2505	明治31年	冬の部	難船や人数駆出す夷講	夷講	人事
2506	明治31年	冬の部	既にして相撲取も見えつ夷講	夷講	人事
2507	明治31年	冬の部	大風の吹く夜なるか那夷講	夷講	人事
2508	明治31年	冬の部	夷講あるは狐にばかされつ	夷講	人事
2509	明治31年	冬の部	見知らぬが袴むづかし夷講	夷講	人事
2510	明治31年	冬の部	袴着て夷講中物めかす	夷講	人事
2511	明治31年	冬の部	夷講の酒酌む銀の栢杓かな	夷講	人事
2512	明治31年	冬の部	酒樽に月さし込むや夷講	夷講	人事
2514	明治31年	冬の部	禅寺をかりて翁忌の二三人	芭蕉忌	人事
2515	明治31年	冬の部	庵中の二三子庭前の枯尾花	枯芒	植物
2516	明治31年	冬の部	幾しぐれ墨うすれゆく笠の文字	時雨	天文
2517	明治31年	冬の部	わびぬれば只うづくまる翁の日	芭蕉忌	人事
2518	明治31年	冬の部	客僧の棒喫ひけり翁の日	芭蕉忌	人事
2519	明治31年	冬の部	枯れ / \て翁忌の庭の菊立てり	芭蕉忌	人事
2520	明治31年	冬の部	二百年の笠の雫や時雨の日	芭蕉忌	人事
2521	明治31年	冬の部	庵となる竹の雫や翁の像	芭蕉忌	人事
2522	明治31年	冬の部	芭蕉忌や即今天下什麼生の俳	芭蕉忌	人事
2523	明治31年	冬の部	二三子去て翁の像と相對す	芭蕉忌	人事
2525	明治31年	冬の部	鹿笛に草の戦ぎや落つる月	鹿	動物
2526	明治31年	冬の部	仇草と刈棄てられし小菊か那	菊	植物
2527	明治31年	冬の部	露草の露月草の月の庭	露草	植物
2528	明治31年	冬の部	秋風や草にからまる殻角大豆	秋の風	天文
2529	明治31年	冬の部	秋草の中に障子や絵師か家	秋の草	植物
2530	明治31年	冬の部	光琳の秋草画く日和か那	秋の草	植物
2531	明治31年	冬の部	草枯や入江に映る暮の雲	草枯	植物
2532	明治31年	冬の部	草すこし螢入れたるがらす哉	螢	動物
2533	明治31年	冬の部	藥草の谷かんばしき春日哉	春日	時候
2534	明治31年	冬の部	日のあたる汀の草やうす氷	薄氷	地理
2535	明治31年	冬の部	草市の草の匂ひや水を打つ	草市	人事
2536	明治31年	冬の部	下草のあるは黄色の花をつく	草花	植物
2537	明治31年	冬の部	紅葉鮒草につらぬき帰るなり	紅葉鮒	動物
2538	明治31年	冬の部	草花や障子古びし絵師が家	草花	植物
2539	明治31年	冬の部	鬪て草の実こぼす雄鷄か那	草の實	植物
2540	明治31年	冬の部	銀杏の草に落ちしが多かりし	銀杏	植物
2541	明治31年	冬の部	草敷いて鮎并べたり舟の中	鮎	動物
2542	明治31年	冬の部	力草吹散らす鷹の羽風か那	鷹	動物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2544	明治31年	冬の部	越調や客筑を撃つ冬の月	冬の月	天文
2545	明治31年	冬の部	ぬくもりや湯婆抱いたる夢心	湯たんぼ	人事
2547	明治31年	冬の部	鳳輦や十月寒花日は南	十月	時候
2548	明治31年	冬の部	小園や冬の日影のこぼれさす	冬日	天文
2549	明治31年	冬の部	谷間の冬の朝日や閑伽をくむ	冬の朝	時候
2550	明治31年	冬の部	閒庭や少し見得たる茶の茗	茶の花	植物
2551	明治31年	冬の部	凧や又洗ふ水の進しり	凧	天文
2552	明治31年	冬の部	明方を神いますべき雲の行方哉	神の旅	人事
2553	明治31年	冬の部	木菟や凝然として晝の月	木菟	動物
2554	明治31年	冬の部	主従に粥まゐらす櫓火哉	櫓	人事
2556	明治31年	冬の部	又字刻す寒月の碑や泉岳寺	寒月	天文
2558	明治31年	冬の部	小春日や動物園の禽の声	小春	時候
2560	明治31年	冬の部	珍草や霜に花咲く植物園	霜	天文
2562	明治31年	冬の部	寒月や舟に見上るお茶の水	寒月	天文
2564	明治31年	冬の部	菜屑多き神田の市や年のゆく	行年	時候
2566	明治31年	冬の部	女多き銀坐通りや枯柳	枯柳	植物
2568	明治31年	冬の部	深川や二三子さそふ翁の日	芭蕉忌	人事
2570	明治31年	冬の部	大根や四谷街道朝車	大根	植物
2572	明治31年	冬の部	寺多き牛込の奥の冬至哉	冬至	時候
2574	明治31年	冬の部	為めに壇を築く九州探題の生海鼠	海鼠	動物
2576	明治31年	冬の部	泥舟に木葉散るなりお茶の水	木葉	植物
2578	明治31年	冬の部	相を罷めし早稲田の邸の木葉哉	木葉	植物
2580	明治31年	冬の部	寒菊に冬静なる離宮哉	冬	時候
2582	明治31年	冬の部	加賀殿のお屋敷跡や冬木立	冬木	植物
2584	明治31年	冬の部	冬枯の日は斜きぬ花やしき	冬枯	植物
2586	明治31年	冬の部	鼠小僧の墓に物いふ寒夜哉	寒夜	時候
2588	明治31年	冬の部	狸穴に近く家しぬ納豆賣	納豆	人事
2590	明治31年	冬の部	凧や蛸殻町の人だかり	凧	天文
2592	明治31年	冬の部	小春日の銀座通や絵草紙屋	小春	時候
2594	明治31年	冬の部	水鳥に松の雫の吹散りぬ	水鳥	動物
2595	明治31年	冬の部	水鳥の見えずなりけり沼の月	水鳥	動物
2596	明治31年	冬の部	水鳥の啼立つ芦の枯葉かな	水鳥	動物
2597	明治31年	冬の部	水鳥の浮いて来るなり波朝日	水鳥	動物
2598	明治31年	冬の部	水鳥の啼く方寒し土手の月	水鳥	動物
2599	明治31年	冬の部	美しき水鳥浮ぶ御講か那	水鳥	動物
2600	明治31年	冬の部	水鳥や風に柳の枯れ尽す	水鳥	動物
2601	明治31年	冬の部	水鳥や篷に顔出す舟の月	水鳥	動物
2602	明治31年	冬の部	水鳥や酒買戻る舟の人	水鳥	動物
2603	明治31年	冬の部	水鳥や枯尽したる宮の森	水鳥	動物
2604	明治31年	冬の部	水鳥の啼くや古江に落つる月	水鳥	動物
2606	明治31年	冬の部	引残す大根たのもし雪の朝	大根	植物
2607	明治31年	冬の部	大根干す三戸の村や冬木立	大根	植物
2608	明治31年	冬の部	馬舟の朝川渡る大根か那	大根	植物
2609	明治31年	冬の部	大根舟に炊ぐ烟や朝月夜	大根	植物
2610	明治31年	冬の部	店先の蜜柑は黄なる大根か那	大根	植物
2611	明治31年	冬の部	沼に沿ふ大根畑や朝の月	大根	植物
2612	明治31年	冬の部	井戸端の大根の屑や薄氷	大根	植物
2613	明治31年	冬の部	清流に大根の土を洗ひけり	大根	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2614	明治31年	冬の部	大根切て水進む刀か那	大根	植物
2615	明治31年	冬の部	拔出でし大根の葉や霜どけぬ	大根	植物
2616	明治31年	冬の部	霜柱大根は引いてしまひけり	大根	植物
2617	明治31年	冬の部	中流を大根舟の流れけ里	大根	植物
2619	明治31年	冬の部	霜やけや痒きにさはる絹のきれ	霜焼	人事
2620	明治31年	冬の部	かんてらに河豚の眼の鈍きか那	河豚	動物
2621	明治31年	冬の部	入定を猶風の吹止まず	凧	天文
2622	明治31年	冬の部	暖かき初の亥の子や里帰り	亥の子	人事
2623	明治31年	冬の部	北風や村の出口の葱畑	葱	植物
2624	明治31年	冬の部	薬喰に皮羽織着たり主じ顔	薬喰	人事
2625	明治31年	冬の部	薬喰唐机など片寄せぬ	薬喰	人事
2626	明治31年	冬の部	草枯や暮の雲出る裏の山	草枯	植物
2627	明治31年	冬の部	護摩壇にしぐれのしぶく灯哉	時雨	天文
2628	明治31年	冬の部	冬の夜の厨に葱をさがし得つ	葱	植物
2629	明治31年	冬の部	柴漬の舟に小魚や午の雨	柴漬	人事
2630	明治31年	冬の部	炉開いて伯夷叔齊を思ふか那	爐開	人事
2631	明治31年	冬の部	炉開の二階に落つる日脚か那	爐開	人事
2632	明治31年	冬の部	炉開の庭に赤松偃蹇す	爐開	人事
2633	明治31年	冬の部	炉開けば秀次殿の使か那	爐開	人事
2634	明治31年	冬の部	唐様の文机を得つ炉を開く	爐開	人事
2635	明治31年	冬の部	炉開や麓の里の鶏の声	爐開	人事
2637	明治31年	冬の部	納豆買ふ町のはづれやうらなひ者	納豆	人事
2638	明治31年	冬の部	精進に納豆の苞のくさきか那	納豆	人事
2639	明治31年	冬の部	納豆賣の老いしが遅く来りけり	納豆	人事
2640	明治31年	冬の部	山寺や松風起る納豆汁	納豆汁	人事
2641	明治31年	冬の部	禅寺や納豆を叩く曉の雲	納豆	人事
2642	明治31年	冬の部	五十にして悟らぬ僧や納豆うつ	納豆	人事
2643	明治31年	冬の部	門前や納豆賣る婆子齒がぬけし	納豆	人事
2644	明治31年	冬の部	納豆賣戻るや寺の裏畑	納豆	人事
2645	明治31年	冬の部	朝曇舟に納豆を叩くか那	納豆	人事
2646	明治31年	冬の部	葱の香や熟のあしたの納豆汁	納豆汁	人事
2647	明治31年	冬の部	寺かりて連歌の会や納豆汁	納豆汁	人事
2648	明治31年	冬の部	俳諧は且つ三斛の納豆汁	納豆汁	人事
2650	明治31年	冬の部	鉢叩来る夜となりぬ寐ざめがち	鉢叩	人事
2651	明治31年	冬の部	明方や橋を越えたる鉢叩	鉢叩	人事
2652	明治31年	冬の部	乾坤を叩き尽して鉢叩	鉢叩	人事
2653	明治31年	冬の部	鉢叩風に聞えずなりにけり	鉢叩	人事
2654	明治31年	冬の部	鉢叩の妻てふものを見まほしき	鉢叩	人事
2655	明治31年	冬の部	米量る妻もありけり鉢叩	鉢叩	人事
2656	明治31年	冬の部	鉢叩昼は飯喰ふ男か那	鉢叩	人事
2657	明治31年	冬の部	子もありて悲しきものよ鉢叩	鉢叩	人事
2658	明治31年	冬の部	鉢叩二人粥喰ふ昼の宿	鉢叩	人事
2659	明治31年	冬の部	鉢叩戻れば軒の朝の月	鉢叩	人事
2660	明治31年	冬の部	鉢叩昼はひさごに潜むべし	鉢叩	人事
2661	明治31年	冬の部	鉢叩も来ぬ夜となりて冬わびし	鉢叩	人事
2662	明治31年	冬の部	鉢叩聞えずなりて夜明か那	鉢叩	人事
2663	明治31年	冬の部	交りや鉢叩に隣る納豆賣	雑	雑
2664	明治31年	冬の部	鉢叩わが妻起す戸口か那	鉢叩	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
2666	明治31年	冬の部	崖の上に月落ちかゝる氷柱か那	垂氷	天文
2667	明治31年	冬の部	草庵や氷柱もさがる雪の朝	雪	天文
2668	明治31年	冬の部	洩るゝ日や氷柱の落つる杉木立	垂氷	天文
2669	明治31年	冬の部	岩山や氷柱輝く暁の星	垂氷	天文
2670	明治31年	冬の部	巖窟に氷柱見上る雫か那	垂氷	天文
2671	明治31年	冬の部	日にうとき石灯籠の氷柱か那	垂氷	天文
2672	明治31年	冬の部	水洒れて滝美しき氷柱か那	垂氷	天文
2673	明治31年	冬の部	滝壺に氷柱の下る五更か那	垂氷	天文
2674	明治31年	冬の部	金碧や氷柱の垂るゝ観音堂	垂氷	天文
2675	明治31年	冬の部	明方の岩に氷柱や滝しぶき	垂氷	天文
3663	明治32年	冬の部	さゝ鳴や山に折るべき花もなし	笹鳴	動物
3664	明治32年	冬の部	枯菊と小さき卒塔婆流れよる	枯菊	植物
3665	明治32年	冬の部	帰花咲くべくも見えぬ老木哉	歸り花	植物
3666	明治32年	冬の部	炉開に何の家例もなかりけり	爐開	人事
3667	明治32年	冬の部	よき水や大根も洗ひ葉も洗ひ	大根	植物
3668	明治32年	冬の部	茶の苔僅かに白し朝煙	茶の花	植物
3669	明治32年	冬の部	見出てる落葉の中の柘榴かな	落葉	植物
3670	明治32年	冬の部	霰うつや石の不動の鼻柱	霰	天文
3671	明治32年	冬の部	時雨るゝや舩に物煮る古き鍋	時雨	天文
3672	明治32年	冬の部	旅なれぬ若き女神もおはすらむ	神の旅	人事
3673	明治32年	冬の部	枯菊や庭に風ふく冬構	雑	雑
3674	明治32年	冬の部	埋火や既にして又かき廻す	埋火	人事
3675	明治32年	冬の部	傳來の大杯や夷子講	夷講	人事
3676	明治32年	冬の部	初氷汀は芹の葉を青み	初氷	天文
3677	明治32年	冬の部	痛棒を喫して冬の月に座す	冬の月	天文
3678	明治32年	冬の部	北風となりて小春の夕さむし	小春	時候
3679	明治32年	冬の部	炭ついで炭の粉をふく青壘	炭	人事
3680	明治32年	冬の部	傾くる笠に曇の雫かな	曇	天文
3681	明治32年	冬の部	若うして炬燵はなれぬ病かな	炬燵	人事
3682	明治32年	冬の部	亡妻の俤を見る櫓火かな	櫓	人事
3683	明治32年	冬の部	座ふとんを叩て物に激すけり	雑	雑
3684	明治32年	冬の部	鴨の毛の風に逆立つ氷かな	雑	雑
3685	明治32年	冬の部	鷹狩の同じ扮装や十二人	鷹狩	人事
3686	明治32年	冬の部	口切や庵の行事の覚書	口切	人事
3687	明治32年	冬の部	二十年昔となりし頭巾哉	頭巾	人事
3688	明治32年	冬の部	煮凍をとかせば鹿の脂哉	煮凝	人事
3689	明治32年	冬の部	二合半の酒温むる世帯かな	温め酒	人事
3690	明治32年	冬の部	顔見せや言葉通ぜぬ和蘭人	顔見世	人事
3691	明治32年	冬の部	お十夜の後世願はぬ人もなし	十夜	人事
3692	明治32年	冬の部	お妾は美人なりけり玉子酒	玉子酒	人事
3693	明治32年	冬の部	はにかむて巨燵に遠き目見え哉	炬燵	人事
3694	明治32年	冬の部	湯婆さめて悲しき事もありぬべし	湯たんぼ	人事
3695	明治32年	冬の部	律の寺山茶花の垣高うして	山茶花	植物
3696	明治32年	冬の部	をしどりの離れては又寄そひぬ	鴛鴦	動物
3697	明治32年	冬の部	神棚に巻納めけり古こよみ	古曆	人事
3698	明治32年	冬の部	善兵衛はいんでしまぬ薬喰	薬喰	人事
3699	明治32年	冬の部	年の市人に物やる切支丹	年の市	人事
3700	明治32年	冬の部	頸剃て寒かる師走八日哉	師走	時候

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3701	明治32年	冬の部	紅筆で氷柱をそむる遊哉	垂氷	天文
3702	明治32年	冬の部	薬うりの口上手なり胼くすり	皸	人事
3703	明治32年	冬の部	頑の妻を持ちけり薬喰	薬喰	人事
3704	明治32年	冬の部	老樂やよき娘持つ網代守	網代	人事
3705	明治32年	冬の部	寒菊に炭のほこりや炭俵	寒菊	植物
3706	明治32年	冬の部	納豆汁其曉の松の風	納豆汁	人事
3707	明治32年	冬の部	寂しさや炉のなき宿の古行燈	圍爐裏	人事
3708	明治32年	冬の部	降積る雪や湯婆の湯をすつる	雪	天文
3709	明治32年	冬の部	籠にあまる葱の葉青き霰哉	霰	天文
3710	明治32年	冬の部	小夜千鳥四條渡れば祇園町	千鳥	動物
3711	明治32年	冬の部	市中に熊の肉賣るあられ哉	霰	天文
3712	明治32年	冬の部	草枯れや物に詣づる女づれ	草枯	植物
3713	明治32年	冬の部	釣干菜日の丸の旗ひるがへり	干菜	人事
3714	明治32年	冬の部	耄碌のはやらぬ頭巾きたりけり	頭巾	人事
3715	明治32年	冬の部	水鳥や城の後の古き沼	水鳥	動物
3716	明治32年	冬の部	老居士の髭の汚れや納豆汁	納豆汁	人事
3717	明治32年	冬の部	枯葦や偶々緋鯉泳き去る	枯蘆	植物
3718	明治32年	冬の部	外套の赤きをつけて猿芝居	外套	人事
3719	明治32年	冬の部	いさかひの頭巾を取るや大童	頭巾	人事
3720	明治32年	冬の部	神を思ふ心切なり神のるす	神の旅	人事
3721	明治32年	冬の部	宵々の灯火くらし冬こもり	冬籠	人事
3722	明治32年	冬の部	大徳を泊めて風呂吹参らせぬ	風呂吹	人事
3723	明治32年	冬の部	炭取を投出しけり雪の上	雪	天文
3724	明治32年	冬の部	火を起す土の火鉢や佗住居	火鉢	人事
3725	明治32年	冬の部	引っかゝる祭の旗や冬木立	冬木	植物
3726	明治32年	冬の部	熊賣の來て待つ雪の渡哉	雪	天文
3727	明治32年	冬の部	達磨忌や土の達磨の冷かに	達磨忌	人事
3728	明治32年	冬の部	風呂吹の冷えかゝりけり膳の上	風呂吹	人事
3729	明治32年	冬の部	風呂吹に口を焼いたる僧都哉	風呂吹	人事
3730	明治32年	冬の部	風呂吹を盛上にけり佛の椀	風呂吹	人事
3731	明治32年	冬の部	風呂吹の鍋をすゑたる廣間哉	風呂吹	人事
3732	明治32年	冬の部	炭焼の或夜風呂吹したりけり	雑	雑
3733	明治32年	冬の部	風呂吹の味噌残りたる小皿哉	風呂吹	人事
3734	明治32年	冬の部	風呂吹の腹の具合や酒ほしき	風呂吹	人事
3735	明治32年	冬の部	殿原の腹立兒やお鷹狩	鷹狩	人事
3736	明治32年	冬の部	鷹狩の岩山暮れて風強し	鷹狩	人事
3737	明治32年	冬の部	鷹狩や吹飛されん握めし	鷹狩	人事
3738	明治32年	冬の部	鷹狩の殿をお諫め申しけり	鷹狩	人事
3739	明治32年	冬の部	鷹狩や黄金賜る小百姓	鷹狩	人事
3740	明治32年	冬の部	鷹狩やせうとの君は文の道	鷹狩	人事
3741	明治32年	冬の部	鷹狩の白馬の人や我が敵	鷹狩	人事
3742	明治32年	冬の部	鷹狩の殿若うして短氣哉	鷹狩	人事
3743	明治32年	冬の部	鷹狩の途に出会ひし念者哉	鷹狩	人事
3744	明治32年	冬の部	鷹狩や武道を励む二少年	鷹狩	人事
3745	明治32年	冬の部	眼を睜けり生海鼠四方の志	海鼠	動物
3746	明治32年	冬の部	雪車に乗る若き女房や人の門	雪舟	人事
3747	明治32年	冬の部	小火鉢や人の女房の遠慮勝	火鉢	人事
3748	明治32年	冬の部	煤掃いて松の翠を眺めけり	煤拂	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3749	明治32年	冬の部	温石に湯婆に母の悲しかり	雑	雑
3750	明治32年	冬の部	寒声や駆落したる隣の子	寒声	人事
3751	明治32年	冬の部	花活の花のしほみや古暦	古暦	人事
3752	明治32年	冬の部	いさゝかのにくみ心や水祝	水祝	人事
3753	明治32年	冬の部	河豚喰ふて死んだ便りもなかりけり	河豚	動物
3754	明治32年	冬の部	年の内に春は立ちけり古今集	年内立春	時候
3755	明治32年	冬の部	蠟燭の既に五寸や年ごもり	年籠	人事
3756	明治32年	冬の部	茶の花や旦に荒き石の霜	茶の花	植物
3757	明治32年	冬の部	乾鮭に文字を刻まん古法帖	乾鮭	人事
3758	明治32年	冬の部	寸鉄を帯ふるものなし桃青忌	芭蕉忌	人事
3759	明治32年	冬の部	忙しの人を誘ひて年忘	年忘	人事
3760	明治32年	冬の部	乾鮭のからび果てたり春星忌	蕪村忌	人事
3761	明治32年	冬の部	北国の雪の話や薬賣	雪	天文
3762	明治32年	冬の部	笹鳴や落葉を照らす日の光	笹鳴	動物
3763	明治32年	冬の部	うつくまり寒夜の吟や影法師	寒夜	時候
3764	明治32年	冬の部	君がため岡見の憂心かな	岡見	人事
3765	明治32年	冬の部	ふし漬に大根の葉などかゝりけり	大根	植物
3766	明治32年	冬の部	餅搗の宵に返りぬ馬鹿息子	餅搗	人事
3767	明治32年	冬の部	追儼すんで蠟燭輝けり	追儼	人事
3768	明治32年	冬の部	寒月や石に當て影法師	寒月	天文
3769	明治32年	冬の部	反古に包むみかんの皮や冬坐敷	冬座敷	人事
3770	明治32年	冬の部	其まゝに死んでしまひし生海鼠哉	海鼠	動物
3771	明治32年	冬の部	神前の水氷りけり寒椿	冬椿	植物
3772	明治32年	冬の部	煮凍や梁にさす夜半の月	煮凝	人事
3773	明治32年	冬の部	大風に吹かれて去りぬ鯨うり	鯨	動物
3774	明治32年	冬の部	書出しをおいてにたるけはひ哉	掛乞	人事
3775	明治32年	冬の部	寒念佛都是女うつくしき	寒念佛	人事
3776	明治32年	冬の部	雪達摩あかつきの星と相對す	雪達磨	人事
3777	明治32年	冬の部	はねかへる鮭の市の霰かな	霰	天文
3778	明治32年	冬の部	はした女の眞赤な顔や雪つぶて	雪遊び	人事
3779	明治32年	冬の部	見せものゝけもの咆ゆるや年の市	年の市	人事
3780	明治32年	冬の部	水仙の鉢の氷や花の精	水仙	植物
3906	明治33年	冬の部	嚴霜や筋骨痛き座禪石	霜	天文
3907	明治33年	冬の部	霜ふるや夜半の潮平かに	霜	天文
3908	明治33年	冬の部	しも晴の筑波や麦は二寸程	霜	天文
3909	明治33年	冬の部	霜よけを除けば花の薫じけり	霜よけ	人事
3910	明治33年	冬の部	恐ろしき地震の後や荒き霜	霜	天文
3911	明治33年	冬の部	霜とんで声あり達摩渡江の凶	霜	天文
3912	明治33年	冬の部	花さげて霜解に行脳み玉ふ	霜	天文
3913	明治33年	冬の部	花屋去て花屑散りぬ霜の庭	霜	天文
3914	明治33年	冬の部	山の氣の黒金臭し霜柱	霜柱	天文
3915	明治33年	冬の部	瀟湘や水に霜ふる朝月夜	霜	天文
3916	明治33年	冬の部	木枯や山のけものゝ糞乾き	凧	天文
3917	明治33年	冬の部	禮樂や魯の正月の朝朗	正月	時候
3918	明治33年	冬の部	夫子老いて二三子と谷の梅を見る	梅	植物
3919	明治33年	冬の部	乾坤の中に生れし海鼠かな	海鼠	動物
3920	明治33年	冬の部	紅きもの着たるもまじり寒念佛	寒念佛	人事
3921	明治33年	冬の部	正面に雪ふりかゝり寒念佛	寒念佛	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
3922	明治33年	冬の部	暁天の氣を吹く老や寒念佛	寒念佛	人事
3923	明治33年	冬の部	難有きものに思ひぬ寒念佛	寒念佛	人事
3924	明治33年	冬の部	大雪の朝な / \ や寒念佛	寒念佛	人事
3925	明治33年	冬の部	講中の世話やきぢゝや寒念佛	寒念佛	人事
3926	明治33年	冬の部	西方の空も尊し寒念佛	寒念佛	人事
3927	明治33年	冬の部	大寒に入りし旦や寒念佛	寒念佛	人事
3928	明治33年	冬の部	恥かしの娘を誘ひ寒念佛	寒念佛	人事
10531	明治33年	冬の部	冷たかや水を飲まんと水に顔	冷たし	時候
10548	明治33年	冬の部	吹上ぐる谷の狭霧や蔦の橋	狭霧	天文
10569	明治33年	冬の部	烏瓜青きを獲たり茶の木原	烏瓜	植物
10577	明治33年	冬の部	鳩吹いて生き残りけり昔人	鳩	動物
4169	明治34年	冬の部	洋服に足駄は寒し小役人	寒さ	時候
4170	明治34年	冬の部	河豚ふゞき海鼠みぞるゝ形かな	雑	雑
4171	明治34年	冬の部	口切や布衣の交り面白き	口切	人事
4172	明治34年	冬の部	山もしぐれ海もしぐれつ天が下	時雨	天文
4173	明治34年	冬の部	俳諧は五升の酒や御命講	御命講	人事
4174	明治34年	冬の部	絨緞の花に据えたる火鉢かな	火鉢	人事
4175	明治34年	冬の部	染物の絹をも裂かん霰かな	霰	天文
4176	明治34年	冬の部	榮耀に飼はるゝ鷹の羽色哉	鷹	動物
4177	明治34年	冬の部	風呂吹の淡きに如かず河豚汁	河豚汁	人事
4178	明治34年	冬の部	河豚喰て発句に俗を罵りぬ	河豚	動物
4179	明治34年	冬の部	凧や貧乏神の火の車	凧	天文
4180	明治34年	冬の部	霜柱踏出てにけり朱の杓	霜柱	天文
4181	明治34年	冬の部	茶の花も小鳥も寒き日なりけり	寒さ	時候
4182	明治34年	冬の部	吾夫を尋ねあてたり薬喰	薬喰	人事
4183	明治34年	冬の部	納豆汁其曉の嶺の雲	納豆汁	人事
4184	明治34年	冬の部	落人の詮議かしこみ楳火哉	楳	人事
4186	明治34年	冬の部	別れとも知らぬ海鼠のあはれ哉	海鼠	動物
4188	明治34年	冬の部	乾鮭に御して渡海の心ざし	乾鮭	人事
4190	明治34年	冬の部	乾鮭や小鼻大鼻曲り鼻	乾鮭	人事
4192	明治34年	冬の部	乾鮭に寒梅の香もなかりけり	乾鮭	人事
4194	明治34年	冬の部	乾鮭や焚く枯菊の薄烟	乾鮭	人事
4195	明治34年	冬の部	天門の氷を開く力かな	氷	天文
4196	明治34年	冬の部	芭蕉忌のふとんかふりて物をよむ	芭蕉忌	人事
4197	明治34年	冬の部	夜興引の咎められたる迷ひ哉	夜興引	人事
4198	明治34年	冬の部	君が代は綿入足袋の老樂し	足袋	人事
4199	明治34年	冬の部	炉開に妻は男の子を生めり	爐開	人事
4200	明治34年	冬の部	詭の火蠟燭やえびす講	夷講	人事
4201	明治34年	冬の部	水仙にかゝる檜の匏屑	水仙	植物
4202	明治34年	冬の部	野は枯れて殺生石の氣騰りぬ	枯野	天文
4203	明治34年	冬の部	埋火の貧しからさる調度かな	埋火	人事
4204	明治34年	冬の部	隠現の鬼形や庭療ふけにけり	焚火	人事
4205	明治34年	冬の部	袴着や母は氏なきへりくだり	袴着	人事
4206	明治34年	冬の部	蛇を見る神の社の春近し	春近し	時候
4207	明治34年	冬の部	冴る月人を苦しむ姿かな	冴る	時候
4208	明治34年	冬の部	吹雪やんで川明らかに流れけり	吹雪	天文
4209	明治34年	冬の部	山見れば眠れり君はあらずして	山眠る	天文
4210	明治34年	冬の部	珍草や寒の雨ふる植物園	寒の雨	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4211	明治34年	冬の部	薬喰ふ小角力二人三人かな	薬喰	人事
4212	明治34年	冬の部	寒垢離や滝の不動の灯明か	寒垢離	人事
4213	明治34年	冬の部	年のくれ人參のんで首くゝり	年の暮	時候
4214	明治34年	冬の部	煤掃の煤に汚れず美なる珠	煤拂	人事
4215	明治34年	冬の部	掛乞の昔語となりけり	掛乞	人事
4216	明治34年	冬の部	夜明くるや追儼の宵を忘れ兒	追儼	人事
4217	明治34年	冬の部	よき酒に卵子割ったる炭火哉	炭	人事
4218	明治34年	冬の部	鯨突鯨の如き漢子哉	鯨	動物
4219	明治34年	冬の部	寐て起きて / \ 春を待つばかり	春待	時候
4220	明治34年	冬の部	炭うりの水仙さげて戻りけり	炭売	人事
4221	明治34年	冬の部	寒念佛例の坊主の頓死哉	寒念佛	人事
4222	明治34年	冬の部	雪沓の痕恐ろしき廟かな	雪沓	人事
4223	明治34年	冬の部	お火焚の跡の寒さや朝詣	御火焚	人事
4225	明治34年	冬の部	歌をよむ妻もこもれり雪車の中	雪舟	人事
4226	明治34年	冬の部	玉の如き男の子菖蒲の産湯哉	菖蒲	植物
4227	明治34年	冬の部	花に酔ひてぬるき湯に入る疲かな	花	植物
4228	明治34年	冬の部	さめやすき湯婆も悲し思ひやり	湯たんぼ	人事
4608	明治35年	冬の部	鷹狩や御手に一枝寒の花	鷹狩	人事
4609	明治35年	冬の部	鷹狩や皆曰く紂討つべしと	鷹狩	人事
4610	明治35年	冬の部	凧の碓氷は悲し海の色	凧	天文
4611	明治35年	冬の部	金槐集海にしぐるゝ姿かな	時雨	天文
4613	明治35年	冬の部	夢に見る滄海の珠や冬ごもり	冬籠	人事
4614	明治35年	冬の部	山門を誦じ出でけり冬至の詩	冬至	時候
4615	明治35年	冬の部	行逢ひて衣の香にくし雪車の中	雪舟	人事
4616	明治35年	冬の部	水仙や冬鶯の死にし曉	水仙	植物
4617	明治35年	冬の部	鴛鴦や枯木吹ちる水の上	鴛鴦	動物
4618	明治35年	冬の部	年忘腹中の詩を盗まれし	年忘	人事
4619	明治35年	冬の部	発句帖萬句もあれと祝ひ言	雑	雑
4620	明治35年	冬の部	寒の入る刻とやなりぬ水の音	寒の入	時候
4621	明治35年	冬の部	粥柱赤きもの着て老菜子	粥柱	人事
4622	明治35年	冬の部	鐵鉢に米も少し寒の梅	寒梅	植物
4623	明治35年	冬の部	初夢の故人や既に執金吾	初夢	人事
4624	明治35年	冬の部	闇汁に風流貌の干菜かな	干菜	人事
4625	明治35年	冬の部	人の妻干菜の蔭にかくれけり	干菜	人事
4626	明治35年	冬の部	こゝにあると人に應へて干菜つる	干菜	人事
4627	明治35年	冬の部	油繪や干菜も下がり森の色	干菜	人事
4628	明治35年	冬の部	君が手のつめたき戀や干菜編み	干菜	人事
4629	明治35年	冬の部	赤蕪の赤きは一時流行ぞ	蕪	植物
4630	明治35年	冬の部	袴着や肌に守の觀世音	袴着	人事
4631	明治35年	冬の部	寒の入五更の豆腐声もなし	寒の入	時候
4632	明治35年	冬の部	袴着や朝日豊さか上りけり	袴着	人事
4633	明治35年	冬の部	難有や納豆に花が咲く法話	納豆	人事
4634	明治35年	冬の部	里神樂祢宜の娘を見たりけり	神樂	人事
4635	明治35年	冬の部	御神樂や五十鈴川波さゞら波	神樂	人事
4636	明治35年	冬の部	雪をふんで杉の下道神樂人	雪	天文
4637	明治35年	冬の部	歌かるた若き従兄の文學士	歌留多	人事
4638	明治35年	冬の部	都府樓の瓦の色や春を待つ	春待	時候
4639	明治35年	冬の部	珍草に春待つ人や鴻鷗館	春待	時候

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
4640	明治35年	冬の部	春待つや或はかきからを丘に焚く	春待	時候
4641	明治35年	冬の部	春待つや美人を見ざること久し	春待	時候
4642	明治35年	冬の部	春待つや時々登る古城の上	春待	時候
4643	明治35年	冬の部	清浄や神樂に雪を焚く夕	雪	天文
4644	明治35年	冬の部	そば湯吹く兒も賢愚や台所	蕎麥湯	人事
4645	明治35年	冬の部	ぬくめ鳥松の梢に旭出でたり	暖め鳥	動物
4646	明治35年	冬の部	荒浪のつらゝかみ去る窟かな	垂氷	天文
4647	明治35年	冬の部	兒見世や寐たる姿の東山	顔見世	人事
4648	明治35年	冬の部	柴漬の獲物買ひけり岸の人	柴漬	人事
4649	明治35年	冬の部	老人の何に驚く岡見哉	岡見	人事
4650	明治35年	冬の部	年木こり雪に黄金を拾ひけり	雪	天文
4651	明治35年	冬の部	乾鮭に眉を描かんとぞ思ふ	乾鮭	人事
4652	明治35年	冬の部	風呂吹を召され候ぞと申す	風呂吹	人事
4653	明治35年	冬の部	顔見せや江戸は名高き男伊達	顔見世	人事
4654	明治35年	冬の部	しはぶきや雑魚寐に洩れし人はたれ	雑魚寝	人事
4655	明治35年	冬の部	垣越に山の眠りや寒の雨	寒の雨	天文
4656	明治35年	冬の部	納豆の寂寞として苞の中	納豆	人事
4657	明治35年	冬の部	河豚汁豆腐軽くして浮きぬ	河豚汁	人事
4658	明治35年	冬の部	納豆汁豆腐や白く潔し	納豆汁	人事
4659	明治35年	冬の部	方正を守る豆腐や狸汁	狸汁	人事
4660	明治35年	冬の部	薬喰豆腐は白き君が兒	薬喰	人事
4661	明治35年	冬の部	煮凍の豆腐や墨子悲めり	煮凝	人事
4662	明治35年	冬の部	けふもやく夕げの豆腐冬ごもり	冬籠	人事
4663	明治35年	冬の部	豆腐汁坐に松影の冬至哉	冬至	時候
4664	明治35年	冬の部	法話未だ已まず豆腐既に氷りぬ	凍る	天文
4665	明治35年	冬の部	詩債あり除夜も豆腐の煮ゆるまで	除夜	時候
4666	明治35年	冬の部	味ひや豆腐の焦げも冬ごもり	冬籠	人事
4667	明治35年	冬の部	袴着やこゝに年ふる陰陽師	袴着	人事
4668	明治35年	冬の部	袴着や軒を并べて三長者	袴着	人事
4669	明治35年	冬の部	袴着の古式はめでた尽し哉	袴着	人事
4670	明治35年	冬の部	納豆臭き寺の男や物不知	納豆	人事
4671	明治35年	冬の部	納豆の容りも厨かな	納豆	人事
4672	明治35年	冬の部	空山に納豆打つ音響きけり	納豆	人事
4673	明治35年	冬の部	納豆汁杓子にさはる物もなし	納豆汁	人事
4674	明治35年	冬の部	雪一白岩戸神樂に夜明けたり	神樂	人事
4675	明治35年	冬の部	冬菜汁葱の臭きを厭ひけり	冬菜	植物
4676	明治35年	冬の部	書きすてつ丸めつ火鉢の火に投ず	火鉢	人事
4677	明治35年	冬の部	逆鱗にふれてまかでぬ枯柳	枯柳	植物
4678	明治35年	冬の部	人の子のあかぎれの手や涙ふく	鞞	人事
4679	明治35年	冬の部	黒土や葱の折葉も凍つきて	葱	植物
4680	明治35年	冬の部	子に頭巾かぶり / \ と一茶坊	頭巾	人事
4681	明治35年	冬の部	寒月やけもの突くべき竹の槍	寒月	天文
4682	明治35年	冬の部	北風の雪吹つける枯木哉	吹雪	天文
4683	明治35年	冬の部	玉子酒夜間物かく小説家	玉子酒	人事
4684	明治35年	冬の部	馬に鍼す冬一日をトしけり	冬	時候
4685	明治35年	冬の部	鐘冴えて聞えん灯見ゆる野の小家	冴る	時候
4686	明治35年	冬の部	昔人の此夜の詩句や年ごもり	年籠	人事
5136	明治36年	冬の部	日山に入ること早し釣干菜	干菜	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
5137	明治36年	冬の部	一爻變して北の窓を塞く	北窓塞	人事
5138	明治36年	冬の部	かへり見る峠の人や日短し	短日	時候
5139	明治36年	冬の部	水鳥や琵琶は寿永の物語	水鳥	動物
5140	明治36年	冬の部	鷹狩や涙を拂ふ蘇武が跡	鷹狩	人事
5141	明治36年	冬の部	寂菜柴漬に鳴く川千鳥	千鳥	動物
5142	明治36年	冬の部	執筆の昔語や桃青忌	芭蕉忌	人事
5143	明治36年	冬の部	冬の雨趣や竹二三竿	冬の雨	天文
5144	明治36年	冬の部	紙衣着て夢や小判を擲ちぬ	紙衣	人事
5145	明治36年	冬の部	年々の金屏の松や冬に入る	冬	時候
5146	明治36年	冬の部	小春晴枯柴採りに裏の山	小春	時候
5147	明治36年	冬の部	小春日の空ものすごき青み哉	小春	時候
5148	明治36年	冬の部	小春日のはや午すぎとなりけり	小春	時候
5149	明治36年	冬の部	小春日の落葉や宵の雨の痕	小春	時候
5150	明治36年	冬の部	草の骨に馬遊ばする小春かな	小春	時候
5151	明治36年	冬の部	冬木立黄鶴楼の跡もなし	冬木	植物
5152	明治36年	冬の部	冬木立遊山ともなく法師原	冬木	植物
5153	明治36年	冬の部	冬木立把栗寒花の詩を獲たり	冬木	植物
5154	明治36年	冬の部	力石横はりけり冬木立	冬木	植物
5155	明治36年	冬の部	鎌倉の大きな寺や冬木立	冬木	植物
5156	明治36年	冬の部	餅搗て居れば其角が酔て来る	餅搗	人事
5157	明治36年	冬の部	餅搗いて主ぶりけりお足輕	餅搗	人事
5158	明治36年	冬の部	餅筵子等の春衣も出来てあり	餅筵	人事
5159	明治36年	冬の部	餅搗を終日寺に遊びけり	餅搗	人事
5160	明治36年	冬の部	餅搗の音も聞ゆる岡見哉	餅搗	人事
5161	明治36年	冬の部	寒声に窮陰の氣を発しけり	寒声	人事
5162	明治36年	冬の部	蠟燭のあたりを拂ふ追儼かな	追儼	人事
5163	明治36年	冬の部	書出しや竜畫きゐる家あるじ	掛乞	人事
5164	明治36年	冬の部	凧の温泉の客稀に來りけり	凧	天文
5165	明治36年	冬の部	孝行な嫁を貰へりお取越	御取越	人事
5166	明治36年	冬の部	達磨忌も何も知らずと答へけり	達磨忌	人事
5167	明治36年	冬の部	みつじ田のくぼみにたまる霰哉	霰	天文
5168	明治36年	冬の部	藥喰漢の武帝を嘲りぬ	藥喰	人事
5169	明治36年	冬の部	焼芋のよろしき芋をたうべけり	焼芋	人事
5170	明治36年	冬の部	クリスマス小袋の銀貨鳴らしけり	クリスマス	人事
5171	明治36年	冬の部	水澗に吹散る雪もなかりけり	水澗	天文
5172	明治36年	冬の部	炭俵三冬の菜屑大根屑	炭俵	人事
5173	明治36年	冬の部	衣配母います時の如くせり	衣配	人事
5174	明治36年	冬の部	娘して送る年貢の炭五俵	炭	人事
5175	明治36年	冬の部	神帰り赦免の沙汰もなかりけり	神帰り	人事
5177	明治36年	冬の部	あら笑止俵に痛き足の骨	雜	雜
5179	明治36年	冬の部	芭蕉七尺影はふまじと思ひけり	芭蕉忌	人事
5181	明治36年	冬の部	浅ましき楢火の松のいぶりかな	楢	人事
5183	明治36年	冬の部	寒の雨巖に声もなかりけり	寒の雨	天文
5185	明治36年	冬の部	凧に吹散る松の鱗かな	凧	天文
5187	明治36年	冬の部	巖が根のゆるがじとする海鼠かな	海鼠	動物
5189	明治36年	冬の部	玄黄の其血吹雪や巖に劍	吹雪	天文
5190	明治36年	冬の部	楢の火やあれこそ厨川二郎	楢	人事
5191	明治36年	冬の部	事納師は木食のすこやかに	事納	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
5192	明治36年	冬の部	方丈に俗の客あり冬椿	冬椿	植物
5193	明治36年	冬の部	雪杳に剛の座の人まかでけり	雪杳	人事
5194	明治36年	冬の部	書出も貧居の吟の一ツかな	掛乞	人事
5195	明治36年	冬の部	日光や冬田の中の水たまり	冬田	天文
5196	明治36年	冬の部	戯の一詩を獲たり厄落	厄落	人事
5197	明治36年	冬の部	寒稽古刃にかゝる霜もなし	寒稽古	人事
5198	明治36年	冬の部	三升の麦種悲し小作人	麦蒔	人事
5199	明治36年	冬の部	麦蒔のしるしの料理赤蕪	麦蒔	人事
5200	明治36年	冬の部	いくさあれば晴れて麦蒔く日も淋し	麦蒔	人事
5201	明治36年	冬の部	麦蒔の摩耶に入る日を惜みけり	麦蒔	人事
5202	明治36年	冬の部	麦蒔に亥の子の餅を振まへり	麦蒔	人事
5203	明治36年	冬の部	綿ほこり綿入つくる老が妻	綿入	人事
5204	明治36年	冬の部	綿入てぬくまれば事もなかりけり	綿入	人事
5205	明治36年	冬の部	綿入や古びにたれど垢つかず	綿入	人事
5206	明治36年	冬の部	綿入や貧しかれども人の親	綿入	人事
5207	明治36年	冬の部	故人句あり綿入れて即ち贈りけり	綿入	人事
5208	明治36年	冬の部	氷裂けて水鴨緑や陽の光	氷	天文
5209	明治36年	冬の部	岩のくぼ目洗ひ水も氷りけり	凍る	天文
5210	明治36年	冬の部	澗水の涸尽したる氷かな	氷	天文
5211	明治36年	冬の部	堅氷に斧打って水探りけり	氷	天文
5213	明治36年	冬の部	巖氷を砕くが如き響かな	氷	天文
5214	明治36年	冬の部	雪つむや十抱への木の下り枝	雪	天文
5215	明治36年	冬の部	年の市音楽隊の通哉	年の市	人事
5216	明治36年	冬の部	神泉苑氷の上の遊かな	氷	天文
5217	明治36年	冬の部	葱洗ふ門川の氷固からず	氷	天文
5218	明治36年	冬の部	除夜の灯や古人のふみに零つ涕	除夜	時候
5219	明治36年	冬の部	眠る山菜作る畑も見たりけり	山眠る	天文
5523	明治37年	冬の部	山寺に冬至の蹊つくりけり	冬至	時候
5524	明治37年	冬の部	佛恩や菜屑を捨てず御取越	御取越	人事
5525	明治37年	冬の部	冬の雨堂塔とぞす金閣寺	冬の雨	天文
5526	明治37年	冬の部	神鳴て鯛さむき山家哉	鯛	動物
5527	明治37年	冬の部	帰去來の句を書捨てつ古曆	古曆	人事
5528	明治37年	冬の部	登る日に眼を射られけり暖め鳥	暖め鳥	動物
5529	明治37年	冬の部	こもり居や地図を四壁の冬座敷	冬座敷	人事
5530	明治37年	冬の部	河豚喰ふて一陽発す臟腑かな	河豚	動物
5531	明治37年	冬の部	さゝ鳴や鴻臚の人の愁思吟	笛鳴	動物
5532	明治37年	冬の部	さゝ鳴や故園の情話日を竟る	笛鳴	動物
5533	明治37年	冬の部	さゝ鳴や俎豆陳ぬるあそび事	笛鳴	動物
5534	明治37年	冬の部	さゝ鳴や自ら笑ふ閑妄想	笛鳴	動物
5535	明治37年	冬の部	さゝ鳴や枯木の中を女の童	笛鳴	動物
5536	明治37年	冬の部	境内の雪を汚して札納	札納	人事
5537	明治37年	冬の部	綿帽子糟糠の妻と呼せり	綿帽子	人事
5538	明治37年	冬の部	此頃の日かげ慕し枯葎	枯葎	植物
5539	明治37年	冬の部	鮫鱈を市にさげすみ通りけり	鮫鱈	動物
5540	明治37年	冬の部	鳥叫や天紅みの雲起る	冬茜	天文
5541	明治37年	冬の部	冬夜吟千里の友に送りけり	冬夜	時候
5542	明治37年	冬の部	茶の友の参り合せし師走かな	師走	時候
5543	明治37年	冬の部	水に住む鱗むせぶ吹雪哉	吹雪	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
5544	明治37年	冬の部	厄落し済みたる市の月夜か南	厄落	人事
5545	明治37年	冬の部	犠牲は毛の荒ものの寒さ哉	寒さ	時候
5546	明治37年	冬の部	良き馬に鍼一ツすや寒の入	寒の入	時候
5547	明治37年	冬の部	温石のぬくみ覚えつ寒の入	寒の入	時候
5548	明治37年	冬の部	虬斬て淵紅みや寒の水	寒の水	天文
5549	明治37年	冬の部	勤行に焰吐くらん寒の中	寒	時候
5550	明治37年	冬の部	寒一日先師の靈を祀りけり	寒	時候
5551	明治37年	冬の部	菊枯れて鳥の蹊となりけり	枯菊	植物
5552	明治37年	冬の部	枯菊を焚いて餉をまゐらせぬ	枯菊	植物
5553	明治37年	冬の部	主の翁炉にほとりして菊をたく	圍爐裏	人事
5554	明治37年	冬の部	句の意落葉に菊ぞ懐しき	落葉	植物
5555	明治37年	冬の部	衰や詩巻に垂るゝ髯寒し	寒さ	時候
5556	明治37年	冬の部	水烟や山川の石にましら啼く	冬の靄	天文
5557	明治37年	冬の部	緋毛布にがらす戸をもる暑かな	毛布	人事
5558	明治37年	冬の部	袴着の客大学を講じけり	袴着	人事
5559	明治37年	冬の部	貝焼の河豚を照す孤燈かな	河豚	動物
5560	明治37年	冬の部	冬の日を愛する心起りけり	冬日	天文
5561	明治37年	冬の部	君が爲河豚な喰ひそと戒しめつ	河豚	動物
5562	明治37年	冬の部	射損じの枯木に折れし獵矢哉	狩	人事
5563	明治37年	冬の部	髪置や男女の席の正うす	髪置	人事
5564	明治37年	冬の部	臘八の暁天にうつ納豆か南	臘八	人事
5565	明治37年	冬の部	皮ごろも梅清香を発しけり	裘	人事
5566	明治37年	冬の部	埋火の消えゆく人の別かな	埋火	人事
5567	明治37年	冬の部	姑蘇遠し夜行く人に鐘冴ゆる	冴る	時候
5568	明治37年	冬の部	寒念佛功德の水も潤にけり	寒念佛	人事
5569	明治37年	冬の部	俳諧は聖道門のそばゆか南	蕎麥湯	人事
5570	明治37年	冬の部	貴妃に酔うて帝は知らず鬼やらひ	追儼	人事
5571	明治37年	冬の部	煮凍の猶腥き悪みけり	煮凝	人事
5572	明治37年	冬の部	大川の氷を渉る首途かな	氷	天文
5573	明治37年	冬の部	禅寺に冬の水わく暖き	冬の水	天文
5574	明治37年	冬の部	山林に冬の水凝る烟かな	冬の水	天文
5575	明治37年	冬の部	此山に黄金花さき冬の水	冬の水	天文
5576	明治37年	冬の部	さゝ鳴や廟をめぐる冬の水	冬の水	天文
5577	明治37年	冬の部	狼のねぶりあまりや冬の水	冬の水	天文
5578	明治37年	冬の部	焼跡をすぎて家あり冬椿	冬椿	植物
5579	明治37年	冬の部	すさましき師走の火事を見たりけり	師走	時候
5580	明治37年	冬の部	野の中の一軒焼くる吹雪か南	吹雪	天文
5581	明治37年	冬の部	火事埃施行の粥の白きか南	粥施行	人事
5582	明治37年	冬の部	枯芭蕉火事をのがれし庭の中	枯芭蕉	植物
5583	明治37年	冬の部	かき炙るわざ巧みなり浪花人	蛎	動物
5584	明治37年	冬の部	かき喰うて俳優を見る浪花哉	蛎	動物
5585	明治37年	冬の部	かき舟や舷にふる雪二寸	蛎	動物
5586	明治37年	冬の部	日蓮はかきくふ頃を去にけり	蛎	動物
5587	明治37年	冬の部	かき殻にまじる千鳥の糞白し	蛎	動物
5588	明治37年	冬の部	冬さうび花開きたる淋しさよ	冬薔薇	植物
5589	明治37年	冬の部	紅皿に落ちて死にけり冬の蠅	冬の蠅	動物
5590	明治37年	冬の部	水鳥の何に驚く羽音哉	水鳥	動物
5591	明治37年	冬の部	乾鮭に一派の宗を開きけり	乾鮭	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
5592	明治37年	冬の部	湯婆して紅顔の人を夢みけり	湯たんぼ	人事
5593	明治37年	冬の部	依稀として孤松を存ず菊の花	菊	植物
5908	明治38年	冬の部	狼に墓の櫓の乱されし	狼	動物
5909	明治38年	冬の部	狼の瘦せて劔に似たる哉	狼	動物
5910	明治38年	冬の部	巖穴に狼人を護りけり	狼	動物
5911	明治38年	冬の部	狼の氣を吐く見たり寒の雨	狼	動物
5912	明治38年	冬の部	狼に我が糧寒き山路哉	狼	動物
5913	明治38年	冬の部	鯛味噌の君や浪花に成長す	鯛味噌	人事
5914	明治38年	冬の部	落葉焚く煙かゝりぬ熊祭	熊祭	人事
5915	明治38年	冬の部	むかし人に別れし岡や桃落葉	落葉	植物
5916	明治38年	冬の部	喬木の沼を繞れる落葉哉	落葉	植物
5917	明治38年	冬の部	人知れず香焚きこめてざこね哉	雑魚寝	人事
5918	明治38年	冬の部	からうたを謠ふくすしや夷講	夷講	人事
5919	明治38年	冬の部	此も一時頭巾に花をかざしけり	頭巾	人事
5920	明治38年	冬の部	鑄物師の祭の頃や花八ツ手	八ツ手の花	植物
5921	明治38年	冬の部	ひたぶるに古を好み紙衣哉	紙衣	人事
5922	明治38年	冬の部	佩玉の鳴る凧や神の旅	神の旅	人事
5923	明治38年	冬の部	細矛千足のさまや神の旅	神の旅	人事
5924	明治38年	冬の部	水仙と孰れか寒き詩の心	水仙	植物
5925	明治38年	冬の部	終焉は巨燧離るゝが如きかな	炬燵	人事
5926	明治38年	冬の部	巨燵して菴の形勝依然たり	炬燵	人事
5927	明治38年	冬の部	秋色が家の巨燵に辜負しけり	炬燵	人事
5928	明治38年	冬の部	置巨燵江戸派の分野酒の跡	炬燵	人事
5929	明治38年	冬の部	芭蕉庵古びたれども巨燵哉	炬燵	人事
5930	明治38年	冬の部	冬前海蕭條として麦まきぬ	冬前海	天文
5931	明治38年	冬の部	冬前海眺めつきて寺に遊びけり	冬前海	天文
5932	明治38年	冬の部	海士が戸に路からびけり冬前海	冬前海	天文
5933	明治38年	冬の部	古松の韻キや冬海に落つ	冬前海	天文
5934	明治38年	冬の部	冬前海辺暖かなれど枯芭	枯芭	植物
5935	明治38年	冬の部	年貢人難波の都しぬびけり	年貢	人事
5937	明治38年	冬の部	裘蒙茸として人と異り	裘	人事
6312	明治39年	冬の部	口切の文や橙黄ばむなど	口切	人事
6313	明治39年	冬の部	冬川や北に渡れば草もなし	冬川	天文
6314	明治39年	冬の部	小石白き坡に出でぬ落葉搔	落葉	植物
6315	明治39年	冬の部	山の物炭百俵や夷講	夷講	人事
6316	明治39年	冬の部	北の窓塞ぎぬ獸通ふらし	北窓塞	人事
6317	明治39年	冬の部	枯芭北見ゆる窓未だあり	枯芭	植物
6318	明治39年	冬の部	川澗や岸高うして家一つ	川澗	天文
6319	明治39年	冬の部	北風を遮る山もなかりけり	北風	天文
6320	明治39年	冬の部	庭前に更に花なし枯芭蕉	枯芭蕉	植物
6321	明治39年	冬の部	鬼潜む昼や日あかき冬木立	冬木	植物
6322	明治39年	冬の部	菊枯れて獨往くべき逕かな	枯菊	植物
6323	明治39年	冬の部	うつくまる背に斜日や落葉搔	落葉	植物
6324	明治39年	冬の部	窪路の石に錦や散紅葉	散紅葉	植物
6325	明治39年	冬の部	搗残す一斗の粟や菊枯るゝ	枯菊	植物
6326	明治39年	冬の部	凧に昼行く鬼を見たりけり	凧	天文
6327	明治39年	冬の部	凧に粟搗きこぼす戸口哉	凧	天文
6328	明治39年	冬の部	枯菊に風あり朋を送り出づ	枯菊	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
6329	明治39年	冬の部	枯菊を刈る違あり小百姓	枯菊	植物
6330	明治39年	冬の部	枯菊を惜まぬ心高き哉	枯菊	植物
6331	明治39年	冬の部	日々に枯行く菊を守りけり	枯菊	植物
6332	明治39年	冬の部	枯菊を見せまゐらする佗しさよ	枯菊	植物
6333	明治39年	冬の部	菊枯れて鴻稀に来る日哉	枯菊	植物
6334	明治39年	冬の部	陸の神水の神旅衣かな	神の旅	人事
6335	明治39年	冬の部	人踏まぬ銀杏落葉や神の旅	神の旅	人事
6336	明治39年	冬の部	枯菊を後に神を送りけり	枯菊	植物
6337	明治39年	冬の部	縹渺の空晨なり神の旅	神の旅	人事
6338	明治39年	冬の部	神の旅磊塊の石を想ひけり	神の旅	人事
6339	明治39年	冬の部	枯菊に遊ぶ誰が子ぞ綿帽子	綿帽子	人事
6340	明治39年	冬の部	綿帽子人は長安古意の中	綿帽子	人事
6341	明治39年	冬の部	隠棲むでやまと言葉や綿帽子	綿帽子	人事
6342	明治39年	冬の部	菜園に吾妻見たりわた帽子	綿帽子	人事
6343	明治39年	冬の部	綿帽子なくて遊女が雪見かな	雪見	人事
6344	明治39年	冬の部	年忘妻やきのふの想人	年忘	人事
6345	明治39年	冬の部	年忘一人は聞きつ川千鳥	年忘	人事
6346	明治39年	冬の部	とかくして師を酔はしめぬ年忘	年忘	人事
6347	明治39年	冬の部	川涸の河原に晝の焚火哉	川涸	天文
6348	明治39年	冬の部	只たのめ莖漬の石もお取越	御取越	人事
6349	明治39年	冬の部	里人の何かに集ふ神無月	神無月	時候
6350	明治39年	冬の部	賣らで去る霹靂魚賣や日みちかき	短日	時候
6351	明治39年	冬の部	水涸れて狩の矢拾ふ川原かな	川涸	天文
6352	明治39年	冬の部	櫓焚いて殺生の身を悔にけり	櫓	人事
6353	明治39年	冬の部	笹鳴や藪の下草尚青き	笹鳴	動物
6354	明治39年	冬の部	貯の油の壺や冬構	冬構	人事
6355	明治39年	冬の部	短日の行へも知らず鳥一つ	短日	時候
6356	明治39年	冬の部	一人ある針子も休む寒さ哉	寒さ	時候
6357	明治39年	冬の部	硯見れば水乾きたる寒さ哉	寒さ	時候
6358	明治39年	冬の部	錆びたれど鎗一筋の寒さ哉	寒さ	時候
6359	明治39年	冬の部	黄金壊く旅恐ろしき時雨哉	時雨	天文
6360	明治39年	冬の部	人なきにしぐるゝ山や大悲閣	時雨	天文
6361	明治39年	冬の部	寒巖の勢を作す達磨の日	達磨忌	人事
6362	明治39年	冬の部	茶の花に嘯くとしもなかりけり	茶の花	植物
6363	明治39年	冬の部	鴨なくやもののふ松尾忠左エ門	鴨	動物
6364	明治39年	冬の部	口切や古びたれども坐右の銘	口切	人事
6365	明治39年	冬の部	橘緑に題す冬至の句作かな	冬至	時候
6366	明治39年	冬の部	年忘人の許しゝ両三句	年忘	人事
6367	明治39年	冬の部	みかん呉れて子を寐させけり年忘	年忘	人事
6368	明治39年	冬の部	年忘俳諧三十六頭顱	年忘	人事
6369	明治39年	冬の部	各の來る遅速や年忘	年忘	人事
6370	明治39年	冬の部	三人に硯一ツや年忘	年忘	人事
6371	明治39年	冬の部	菜畑に妻出行くよ年忘	年忘	人事
6372	明治39年	冬の部	曾遊の山を描くや年忘	年忘	人事
6373	明治39年	冬の部	年忘すと押やりつ灯下の書	年忘	人事
6374	明治39年	冬の部	あるものに風呂吹切るや年忘	年忘	人事
6375	明治39年	冬の部	賣尽す茶器に悔あり年忘	年忘	人事
6376	明治39年	冬の部	年忘越の友より送りもの	年忘	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
6377	明治39年	冬の部	誰が得たる古短冊や年忘	年忘	人事
6378	明治39年	冬の部	二三子が題の所望や年忘	年忘	人事
6379	明治39年	冬の部	北の窓ふさく因に干菜哉	北窓塞	人事
6380	明治39年	冬の部	稀に鳴る神や北窓ふさぎけり	北窓塞	人事
6381	明治39年	冬の部	佗を知る畑や北の窓ふさぐ	北窓塞	人事
6382	明治39年	冬の部	川澗を見下ろす岡や風の吹く	川澗	天文
6383	明治39年	冬の部	川澗に日落る旅を急ぎけり	川澗	天文
6384	明治39年	冬の部	隙間もる日の短長や冬坐敷	冬座敷	人事
6385	明治39年	冬の部	絵草紙のをかしき添へつ衣配	衣配	人事
6386	明治39年	冬の部	皮ごろも幾たび琵琶に涙哉	裘	人事
6387	明治39年	冬の部	松明に沼の廣さや梟啼く	梟	動物
6388	明治39年	冬の部	人に示す遊戯文字や厄落し	厄落	人事
6389	明治39年	冬の部	さゝ鳴を驚かしたる斧斤かな	笹鳴	動物
6390	明治39年	冬の部	夜竊かに生海鼠の桶を覗きけり	海鼠	動物
6391	明治39年	冬の部	めら / \ と燃ゆる火急や河豚汁	河豚汁	人事
6392	明治39年	冬の部	雲に巻舒あり生海鼠を相るといつれ	海鼠	動物
6393	明治39年	冬の部	雪車が来て散らばる町の子とも哉	雪舟	人事
6394	明治39年	冬の部	大寒の夜の響や水時計	大寒	時候
6395	明治39年	冬の部	杉風のあき人ぶりや年の市	年の市	人事
6396	明治39年	冬の部	兒見せの昔を夢の炬燵かな	炬燵	人事
6670	明治40年	冬の部	遊獵の幸なきことを吟じけり	狩	人事
6671	明治40年	冬の部	十年の山居遊獵の友が来る	狩	人事
6672	明治40年	冬の部	人の着る毛布もほしや年貢時	年貢	人事
6673	明治40年	冬の部	我旅の遠々しさよ古こよみ	古暦	人事
6674	明治40年	冬の部	古暦家に債もなかりけり	古暦	人事
6675	明治40年	冬の部	冬の日や樹を伐仆す五六本	冬の日	時候
6676	明治40年	冬の部	湯豆腐や少年輩は狩に行く	湯豆腐	人事
6677	明治40年	冬の部	巻中の艶な一句や年忘	年忘	人事
6678	明治40年	冬の部	主癖あり客に媚なし年忘	年忘	人事
6679	明治40年	冬の部	夜話の人こそ知らね垂氷かな	垂氷	天文
6680	明治40年	冬の部	笹鳴や貢の氷魚の皆活くる	笹鳴	動物
6681	明治40年	冬の部	茶島に普請の屑も師走なる	師走	時候
6682	明治40年	冬の部	名に高き早川にして氷かな	氷	天文
6683	明治40年	冬の部	氷堅し人と別れて二三日	氷	天文
6684	明治40年	冬の部	氷る沼岸の高木の風に反る	凍る	天文
6685	明治40年	冬の部	誰がわざの神の扉に雪つぶて	雪遊び	人事
6686	明治40年	冬の部	乳母が居る家の灯を見て雪滑り	雪遊び	人事
6687	明治40年	冬の部	水涕や只水仙の爲に坐す	水仙	植物
6688	明治40年	冬の部	我馬の驚きやすき枯野哉	枯野	天文
6689	明治40年	冬の部	落窪に水田が見ゆる枯野哉	枯野	天文
6690	明治40年	冬の部	前書も三度更ゆ冬籠の句	冬籠	人事
6691	明治40年	冬の部	奥の田は水も落さず神の留守	神の旅	人事
6692	明治40年	冬の部	金銭を見るに満地の木葉哉	木葉	植物
6693	明治40年	冬の部	雪垣にちよとかくれけり歌舞の人	雪垣	人事
6694	明治40年	冬の部	十二橋家悉く雪垣す	雪垣	人事
6695	明治40年	冬の部	雪垣をして南山を見ずなりぬ	雪垣	人事
6696	明治40年	冬の部	雪垣に取残されし八ツ手哉	雪垣	人事
6697	明治40年	冬の部	雪垣や猪かつぎ込む雪明り	雪垣	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
6698	明治40年	冬の部	聖經に倦で湯豆腐欲しけり	湯豆腐	人事
6699	明治40年	冬の部	湯豆腐の味知れと霰かな	湯豆腐	人事
6700	明治40年	冬の部	湯豆腐の一味自力の法語哉	湯豆腐	人事
6701	明治40年	冬の部	湯豆腐や日を短かざる人の来て	湯豆腐	人事
6702	明治40年	冬の部	誤って師の坊に中つ雪つぶて	雪遊び	人事
6703	明治40年	冬の部	山に擬して反古つみけり冬籠	冬籠	人事
6704	明治40年	冬の部	時ならず馬で山越す霰かな	霰	天文
6705	明治40年	冬の部	碧梧桐が佐渡の咄や年忘	年忘	人事
6706	明治40年	冬の部	物あれバ垂氷す水の在所哉	垂氷	天文
6707	明治40年	冬の部	炭俵賣る午過や垂氷落つ	垂氷	天文
6708	明治40年	冬の部	浪に日の網に幸なし冬の海	冬の海	天文
6709	明治40年	冬の部	眠れりといふ山も見ゆ冬の海	冬の海	天文
6710	明治40年	冬の部	親汐のあたりの雲か冬の海	冬の海	天文
6711	明治40年	冬の部	麦蒔や人の後の冬の海	冬の海	天文
6712	明治40年	冬の部	磯の木に雷落ちて冬の海	冬の海	天文
6713	明治40年	冬の部	凶書室にいつもの人と煖爐哉	暖爐	人事
6714	明治40年	冬の部	煖爐焚や雪の兎を語草	暖爐	人事
6715	明治40年	冬の部	卓上のみかんに遠き煖爐哉	暖爐	人事
6716	明治40年	冬の部	去る人を煖爐離れて送りけり	暖爐	人事
6717	明治40年	冬の部	二人寄れば我顔ほてる煖爐哉	暖爐	人事
6718	明治40年	冬の部	山越の苛き年貢や枯芒	枯芒	植物
6723	明治40年	冬の部	親汐に逆ふ船や冬の月	冬の月	天文
6725	明治40年	冬の部	紙鳶の絵の腹案もあり師走哉	師走	時候
6726	明治40年	冬の部	水仙に似げなき手蹟拙さよ	水仙	植物
6727	明治40年	冬の部	水仙の南帖梅の北碑かな	雑	雑
6728	明治40年	冬の部	古駅此一木のちりもみぢ	散紅葉	植物
6729	明治40年	冬の部	豆腐買ふ頃一しきり散紅葉	散紅葉	植物
6730	明治40年	冬の部	斧入れて見る / \ 中や散紅葉	散紅葉	植物
6731	明治40年	冬の部	兎穴に蓄の栗ちりもみぢ	散紅葉	植物
6732	明治40年	冬の部	ちり紅葉買山の錢足らぬ也	散紅葉	植物
6733	明治40年	冬の部	大川のへりゆく水や神の留守	神の旅	人事
6734	明治40年	冬の部	鶴々の水鳥一つ神の留守	神の旅	人事
6735	明治40年	冬の部	小舟囲ふ川辺の里や神の留守	神の旅	人事
6736	明治40年	冬の部	残る菊の黄がちとなりぬ神の留守	神の旅	人事
6737	明治40年	冬の部	いさかひの地も末枯や神の留守	神の旅	人事
6985	明治41年	冬の部	濱便り日々届く小春かな	小春	時候
6986	明治41年	冬の部	鉄瓶に汲む茶の水や霜朝夕	霜	天文
6987	明治41年	冬の部	産屋明きの日の朝晴や笹鳴す	笹鳴	動物
6988	明治41年	冬の部	一語だも著せず頭巾清らなり	頭巾	人事
6989	明治41年	冬の部	さつ箭とぶと見るや頭巾の漢子出づ	頭巾	人事
6990	明治41年	冬の部	並木切るに公事定まりぬ冬構	冬構	人事
6991	明治41年	冬の部	酢徳利も空に賣れたり夕氷	氷	天文
6992	明治41年	冬の部	志士年忌堅氷の詩を作りけり	氷	天文
6993	明治41年	冬の部	寒月や皆そら事の小町塚	寒月	天文
6994	明治41年	冬の部	象潟に美妓のいつ来て冬の月	冬の月	天文
6995	明治41年	冬の部	截鉄の斬釘の筆氷りけり	凍る	天文
6996	明治41年	冬の部	厚氷朝課の素讀果しけり	氷	天文
6998	明治41年	冬の部	この鉞にこの鎌に初しぐれかな	時雨	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
6999	明治41年	冬の部	柴門をくぐる乾鮭の孤峭かな	乾鮭	人事
7000	明治41年	冬の部	削去りて二三句存す除夜の鐘	除夜の鐘	人事
7001	明治41年	冬の部	等類の句に恥知るや年忘	年忘	人事
7002	明治41年	冬の部	足袋はくや年々つもの登山癖	足袋	人事
7003	明治41年	冬の部	冬藏の林檎紅み煥発す	冬	時候
7004	明治41年	冬の部	民間に氏かゞやかす神樂かな	神樂	人事
7005	明治41年	冬の部	窮陰の地に火のほ立つ神樂かな	神樂	人事
7006	明治41年	冬の部	一山の一皴長し冬の川	冬川	天文
7007	明治41年	冬の部	冬木描く筆意冬川流れけり	冬川	天文
7008	明治41年	冬の部	冬川や北に片よる鳳凰堂	冬川	天文
7009	明治41年	冬の部	洲を行けば山の裏見ゆ冬の川	冬川	天文
7010	明治41年	冬の部	冬川や火見措子も岸並木	冬川	天文
7011	明治41年	冬の部	方正の圀ろり孤獨の二人かな	圍爐裏	人事
7012	明治41年	冬の部	みろり端や鞆なき山刀の底光り	圍爐裏	人事
7013	明治41年	冬の部	大楯のみろりに兀と酒の燭	圍爐裏	人事
7014	明治41年	冬の部	雪沓に燃えつけば去るみろり哉	圍爐裏	人事
7015	明治41年	冬の部	根楯葉楯みろりにさがす雪の竿	圍爐裏	人事
7019	明治41年	冬の部	怙字恃字に灯前の眼を寒うしぬ	寒さ	時候
7021	明治41年	冬の部	此國の頭巾も脱がぬ頃なりし	頭巾	人事
7022	明治41年	冬の部	里の子と路に遊べり風の神	冬の風	天文
7023	明治41年	冬の部	風邪の神に後見らるゝ灯下哉	風邪	人事
7169	明治42年	冬の部	冬空や咎なくてやは墓木伐る	冬空	天文
7170	明治42年	冬の部	一字刪る誄辞の稿や冬空に	冬空	天文
7171	明治42年	冬の部	短日や学人菊を焚く違	短日	時候
7172	明治42年	冬の部	活計に輕舸操縦日短き	短日	時候
7173	明治42年	冬の部	短日や書は浩漣にして售れず	短日	時候
7174	明治42年	冬の部	來年の暦話も日短に	短日	時候
7175	明治42年	冬の部	朱に墨に製図師に晷短しや	短日	時候
7176	明治42年	冬の部	話柄漁季に岐れ短き日脚哉	短日	時候
7177	明治42年	冬の部	待ちわぶる樺太便り日短き	短日	時候
7178	明治42年	冬の部	短日や文庫の森の夕鴉	短日	時候
7179	明治42年	冬の部	日短かの己れ急げば獵人も	短日	時候
7180	明治42年	冬の部	短日の虎を打ちしは武松也	短日	時候
7181	明治42年	冬の部	貧を侮る又の使や鴨の声	鴨	動物
7182	明治42年	冬の部	鴨啼くや家宝に図会と繁昌記	鴨	動物
7183	明治42年	冬の部	廩粟の耗りを憂や里冬木	冬木	植物
7184	明治42年	冬の部	石投げて冬木に中つる晷哉	冬木	植物
7185	明治42年	冬の部	卷末に至れば冬木鳴やみぬ	冬木	植物
7186	明治42年	冬の部	法に飢ゑ道に渴きぬ寺冬木	冬木	植物
7187	明治42年	冬の部	筆意反り刀法屈む冬木哉	冬木	植物
7188	明治42年	冬の部	水鳥や狂言綺語に夢疲る	水鳥	動物
7189	明治42年	冬の部	水鳥や素懷を遂げて君と在り	水鳥	動物
7190	明治42年	冬の部	水鳥や沙弥の昔を見知る松	水鳥	動物
7191	明治42年	冬の部	水鳥や遺墨見し眼に筆法も	水鳥	動物
7192	明治42年	冬の部	浮寝鳥旅泊の綺夢に砑す	水鳥	動物
7194	明治42年	冬の部	筆硯又笹鳴の句を思ふ	笹鳴	動物
7196	明治42年	冬の部	因に楯の一句あり證シとす	楯	人事
7289	明治43年	冬の部	新嘗の祭器見て久し冬籠	冬籠	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
7290	明治43年	冬の部	課題再び香奩體や冬ごもり	冬籠	人事
7291	明治43年	冬の部	道しるべに誰が救はれむ冬ごもり	冬籠	人事
7292	明治43年	冬の部	瑣事の文に羽檄と題す冬籠	冬籠	人事
7293	明治43年	冬の部	妻賢に厨あかるし冬ごもり	冬籠	人事
7294	明治43年	冬の部	跡を絶ちし悪獣を繪に冬籠	冬籠	人事
7295	明治43年	冬の部	薪割てふと樹齡知る冬ごもり	冬籠	人事
7297	明治43年	冬の部	後援の事氣短に冬籠	冬籠	人事
7388	明治44年	冬の部	橙黄に吉事あり山眠る里	山眠る	天文
7389	明治44年	冬の部	里冬木他が舌鋒を挫くべし	冬木	植物
7390	明治44年	冬の部	筆陣の虚を狙ふ主冬日向	冬日	天文
7391	明治44年	冬の部	水鳥に夜学提灯はや過ぎし	水鳥	動物
7392	明治44年	冬の部	雪下ろし終へよ狸が煮えたるに	雪下し	人事
7393	明治44年	冬の部	山僧の跡雪沓の尻長に	雪沓	人事
7394	明治44年	冬の部	句意に人と相識るや水鳥も見て	水鳥	動物
7395	明治44年	冬の部	壽宴に皆詩あり遠近山眠る	山眠る	天文
7396	明治44年	冬の部	松雪折れ霽れての瀬鳴高々に	雪折れ	植物
7397	明治44年	冬の部	杉山を負ひ戸々富めり冬の水	冬の水	天文
7398	明治44年	冬の部	旅人はや大槻の陰に冬田哉	冬田	天文
7399	明治44年	冬の部	冬木仆す三五人の鬨疾き雲に	冬木	植物
7400	明治44年	冬の部	水郷の魚買ひに大寒日和あり	大寒	時候
7401	明治44年	冬の部	雪沓の産土神詣はれがまし	雪沓	人事
7403	明治44年	冬の部	菅薦の句もありけむを霜の声	霜	天文
7525	明治45年	冬の部	掃除検査も小家勝神の留守をすむ	神の旅	人事
7526	明治45年	冬の部	神を送る峯又峯の尽くるなき	神の旅	人事
7528	明治45年	冬の部	枯菊を見てありき思ふ遺句の事	枯菊	植物
7529	明治45年	冬の部	冬かまへ早し垣の内の落葉ふむ	冬構	人事
7530	明治45年	冬の部	村一番憎まれものゝ冬構	冬構	人事
7531	明治45年	冬の部	年忘一偈に襟を正うす	年忘	人事
7532	明治45年	冬の部	隠語解せぬ我醉早し年忘	年忘	人事
7533	明治45年	冬の部	大官と美人と寒霧を衝て雪車	雪舟	人事
7534	明治45年	冬の部	雪舟疾し北國穹廬夕づく日	雪舟	人事
7535	明治45年	冬の部	笹鳴や家祖祭の珍長き薯	笹鳴	動物
7536	明治45年	冬の部	屋高煤掃き終へし不時雷鳴に	煤拂	人事
7537	明治45年	冬の部	煤箒立つる庭青空も見し	煤拂	人事
7547	大正2年	冬の部	雪雲の一重雨雲の八重春近き	春近し	時候
7548	大正2年	冬の部	名残焼く糲穀の阜春隣	春近し	時候
7550	大正2年	冬の部	さながらに雪道作れ下部ども	雪	天文
7669	大正2年	冬の部	はつあられ菊の奴を鞭ちぬ	霰	天文
7671	大正2年	冬の部	さゝ鳴や神に誓ひし面晴れ	笹鳴	動物
7673	大正2年	冬の部	水の低きに就く音とさゝ鳴と	笹鳴	動物
7674	大正2年	冬の部	伐木に戸寒し昔の頭巾思ふ	頭巾	人事
7675	大正2年	冬の部	雷鳴のこれを名残か蕪引	蕪引	人事
7676	大正2年	冬の部	草搾り木しぼり尽きて水涸れ / \	水涸	天文
7677	大正2年	冬の部	冬山に國見す樹を伴石を侶	冬山	天文
7752	大正3年	冬の部	話柄又薫染の事さゝ鳴て	笹鳴	動物
7754	大正3年	冬の部	枯菊の句もなし雪に埋もれ泣く	雪	天文
7833	大正5年	冬の部	風呂吹の味噌を點ずる第一義	風呂吹	人事
7834	大正5年	冬の部	大晴レの烟となりぬ冬の水	冬の水	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
7835	大正5年	冬の部	寒の雨に老木の腕潤へり	寒の雨	天文
7836	大正5年	冬の部	この凍に酔人と道に別れけり	凍る	天文
7837	大正5年	冬の部	土掘れバ物の根切らる夕しぐれ	時雨	天文
7838	大正5年	冬の部	冬枯や尚鋤下ろす土の友	冬枯	植物
7839	大正5年	冬の部	和韻至る硯池の氷解にけり	氷	天文
7841	大正5年	冬の部	新涼の目に澄み耳に徹りけり	新涼	時候
7842	大正5年	冬の部	寒ン晴やまこと獸の穴にして	寒晴	天文
7843	大正5年	冬の部	晝餉最中に獸狩の鬨の声(冬籠)	狩	人事
7844	大正5年	冬の部	夜学出て一尺の雪に呼びかはす(山家)	雪	天文
7845	大正5年	冬の部	門に立つ我が放心よ三十三才	鷓鴣	動物
7846	大正5年	冬の部	早起枯菊を焚く我寒に入る	寒の入	時候
7847	大正5年	冬の部	一ところの雲明り冬木立かな	冬木	植物
7848	大正5年	冬の部	狐見ゆたま / \ 大寒の靄ゆうべ	大寒	時候
7849	大正5年	冬の部	書楼より隣の干菜見る久し	干菜	人事
7850	大正5年	冬の部	沈思より起てバ冬木の怖ろしき	冬木	植物
7851	大正5年	冬の部	氷餅につく雀追へバ日昇る	氷餅	人事
7852	大正5年	冬の部	画賛の句を想ふ庭の枯柳	枯柳	植物
7853	大正5年	冬の部	書楼下る毎に北風の音す也	北風	天文
7854	大正5年	冬の部	画幅巻いて商人辞去す枯柳	枯柳	植物
7855	大正5年	冬の部	北風の屋鳴り画賛の筆を措く	北風	天文
7857	大正5年	冬の部	長辰宮南に暗き椿かな	椿	植物
7859	大正5年	冬の部	風邪の夢に南朝の古蹟冬されし	冬ざれ	時候
7860	大正5年	冬の部	薪足る積嵩や鷓鴣鳴く	鷓鴣	動物
7861	大正5年	冬の部	大寒や夕晴の山の彼方海	大寒	時候
7862	大正5年	冬の部	風邪に臥して土うつ寒の雨をきく	寒の雨	天文
7863	大正5年	冬の部	土玄し北國希有に雪ふらぬ	雪	天文
7864	大正5年	冬の部	病起一朝の雪の深さを行く	雪	天文
7865	大正5年	冬の部	氷餅吊す夜や谿川の水の音	氷餅	人事
7866	大正5年	冬の部	潜む魚に氷砕くや日昇る	氷	天文
7867	大正5年	冬の部	晝櫓火に傳家刀見る機会哉	櫓	人事
7868	大正5年	冬の部	日暄かに一炉根櫓の燃え尽きず	櫓	人事
7869	大正5年	冬の部	高山を後ろに推す雪舟の疾き	雪舟	人事
7870	大正5年	冬の部	夜学又大勢となりぬ積る雪	雪	天文
7871	大正5年	冬の部	春近き消息や硯池乾きけり	春近し	時候
7872	大正5年	冬の部	難解の書を讀了へぬ春隣	春近し	時候
7873	大正5年	冬の部	山脈の雪に書樓の起居かな	雪	天文
7874	大正5年	冬の部	炭竈の一時冬日正面なる	冬日	天文
7875	大正5年	冬の部	冬日落ちゆくに尚斧揮ふあり	冬日	天文
8031	大正5年	冬の部	草鞋の泥乾くまもなし栗落葉	落葉	植物
8032	大正5年	冬の部	朽葉ふみゆけバ菊の黄活きてあり	朽葉	植物
8033	大正5年	冬の部	書樓日々木葉掃出す三五片	落葉	植物
8034	大正5年	冬の部	書出シをかゝねばならぬ日の暮るゝ	掛乞	人事
8035	大正5年	冬の部	吾庭にのみあり芭蕉枯れにけり	枯芭蕉	植物
8036	大正5年	冬の部	山郭や我は顔なる干大根	干大根	人事
8037	大正5年	冬の部	霜朝日障子の中に泣く乳児よ	霜	天文
8038	大正5年	冬の部	莢開いて豆自から落つ達磨忌	達磨忌	人事
8040	大正5年	冬の部	遠山の雪看る市の蜜柑かな	雪	天文
8041	大正5年	冬の部	遠山の雪耀けり一架の書	雪	天文

冬の部

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
8042	大正5年	冬の部	鷹凛々雪尖る北方の山	雪	天文
8043	大正5年	冬の部	雪疊む山遠し大河日に涸るゝ	雪	天文
8044	大正5年	冬の部	玻璃窓の曇拭へり庭冬木	冬木	植物
8045	大正5年	冬の部	海底へ冬雷の失せにけり	冬雷	天文
8046	大正5年	冬の部	机一つ蔵書さてなし煤拂	煤拂	人事
8047	大正5年	冬の部	すゝの日や到来の柑子端近な	煤拂	人事
8048	大正5年	冬の部	子等が頬いよ / \ 紅し年の暮	年の暮	時候
8049	大正5年	冬の部	鬢斜に燭寒し海鳥の鳴く	寒さ	時候
8050	大正5年	冬の部	曲闕れバ冬木原又風の吹く	冬木	植物
8058	大正6年	冬の部	河に臨むて氷堅きを信じけり	氷	天文
8059	大正6年	冬の部	漁夫の群大きくなりぬ厚氷	氷	天文
8062	大正6年	冬の部	吹雪ぬくや我が肺腸のもゆる音	吹雪	天文
8063	大正6年	冬の部	高樅を楯に家栖む冬日かな	冬の日	時候
8064	大正6年	冬の部	泣きやまぬ兒に吹雪婆の驚破來る	吹雪	天文
8065	大正6年	冬の部	青空を見るうれしさよ屋根の雪	雪	天文
8066	大正6年	冬の部	朝な / \ 雪道踏むや山遠き	雪	天文
8067	大正6年	冬の部	大雪に露はなる我頭かな	雪	天文
8068	大正6年	冬の部	日景通ふ雪に埋れて鶏の鳴く	雪	天文
8069	大正6年	冬の部	雀の如ふくらみて雪の人の來る	雪	天文
8070	大正6年	冬の部	閑話良久し屢々垂氷落つ	垂氷	天文
8071	大正6年	冬の部	村文庫へ雪沓の痕新らしき	雪沓	人事
8072	大正6年	冬の部	門札の我名見古りぬ枯柳	枯柳	植物
8073	大正6年	冬の部	磧より炭竈の烟見上げたり	炭がま	人事
8075	大正6年	冬の部	青空を見る偶々や冬の水	冬の水	天文
8076	大正6年	冬の部	凍霧の中夜明の瀬鳴り高まさる	凍霧	天文
8077	大正6年	冬の部	屋根の雪おろす本堂鳴ひぞく	雪下し	人事
8190	大正6年	冬の部	初冬の雲に壓さるゝ小村哉	初冬	時候
8191	大正6年	冬の部	常盤木に神鎮まるや玉霰	霰	天文
8192	大正6年	冬の部	雑穀地にこぼれ霰雲の飛ぶ	霰	天文
8193	大正6年	冬の部	霰急渡りおくれし藪小鳥	霰	天文
8194	大正6年	冬の部	廬を出でゝ古人に似たる時雨哉	時雨	天文
8195	大正6年	冬の部	獨ゆく我に木葉のふることよ	木葉	植物
8197	大正6年	冬の部	ゆく春のことというて山を下りけり	行春	時候
8199	大正6年	冬の部	輕寒と怕る眉目や小六月	小春	時候
8200	大正6年	冬の部	雪の笹に馬遊バすや事始	事始	人事
8201	大正6年	冬の部	鮭さげし人にゆづりぬ落葉道	落葉	植物
8204	大正6年	冬の部	雀飢ゑて軒を離れず枯柳	枯柳	植物
8206	大正6年	冬の部	天高地厚菊もろ / \ の影	菊	植物
8207	大正6年	冬の部	賢といはむ菊に仕へて樂める	菊	植物
8209	大正6年	冬の部	枝を擇む悲しき鳥や冬木立	冬木	植物
8217	大正7年	冬の部	群木は雪にうもれて松と我	雪	天文
8218	大正7年	冬の部	釜の湯の徒に沸騰す吹雪哉	吹雪	天文
8219	大正7年	冬の部	雪の城垂氷の砦書に籠る	雑	雑
8220	大正7年	冬の部	我が蒲團の裾邊萬國地圖掛る	蒲團	人事
8221	大正7年	冬の部	この雪の下に青菜の偃しあらむ	雪	天文
8222	大正7年	冬の部	風邪去らぬ頭冬川に臨みけり	冬川	天文
8223	大正7年	冬の部	今朝も掃かれず障子の羽虫いつ凍てし	凍る	天文
8224	大正7年	冬の部	冬川に明るき樹影帆影哉	冬川	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
8225	大正7年	冬の部	産土神の杉を力や雪の中	雪	天文
8226	大正7年	冬の部	凍霧晴に人々の晴耀けり	凍霧	天文
8227	大正7年	冬の部	樹々骨の如く凍霧裂けて飛ぶ	凍霧	天文
8228	大正7年	冬の部	朝日充ちて蒼空に凍霧消えゆけり	凍霧	天文
8229	大正7年	冬の部	雪凍てし響あり稀に行く人に	雪	天文
8230	大正7年	冬の部	雪沓の又しも足に合はぬかな	雪沓	人事
8373	大正7年	冬の部	木葉飛ぶ頻に谷の水騒ぐ	木葉	植物
8374	大正7年	冬の部	神儼に杜にいますや散紅葉	散紅葉	植物
8375	大正7年	冬の部	竹伐て紅葉大方ちらしけり	散紅葉	植物
8376	大正7年	冬の部	新嘗のたなつもの紅葉散はゆる	散紅葉	植物
8377	大正7年	冬の部	人并に干菜釣得て妻のあり	干菜	人事
8378	大正7年	冬の部	かの母も子等が需むる胼薬	皸	人事
8380	大正7年	冬の部	枯野ゆくまがつひ何に潜みたる	枯野	天文
8382	大正7年	冬の部	いかなれば物狂はしう霰うつ	霰	天文
8384	大正7年	冬の部	行年や尚あり / \ と天の川	行年	時候
8385	大正7年	冬の部	日短く師走の空の窄まりぬ	師走	時候
8386	大正7年	冬の部	少間に只山を見つ年の暮	年の暮	時候
8387	大正7年	冬の部	或日獨書齋の煤を拂ひけり	煤拂	人事
8388	大正7年	冬の部	足跡もなき鎮守の雪や札納	札納	人事
8389	大正7年	冬の部	行年の一日の晴を惜みけり	行年	時候
8390	大正7年	冬の部	大方の人に咎なし年忘	年忘	人事
8391	大正7年	冬の部	年尽るまで枯菊を守りけり	枯菊	植物
8392	大正7年	冬の部	書出シ配り終へて主人澹如たり	掛乞	人事
8393	大正7年	冬の部	子等が歌ふこん / \ 霰年暮るゝ	年の暮	時候
8395	大正7年	冬の部	この寒さ温石いかにし給ひし	温石	人事
8405	大正8年	冬の部	飴笹のひたからびけり冬籠	冬籠	人事
8407	大正8年	冬の部	春立つや衣裳好みの甲斐 / \ し	立春	時候
8408	大正8年	冬の部	霜柱ゆく / \ 筑波遙かなり	霜柱	天文
8409	大正8年	冬の部	魚ハ淵に潜みて久し霜柱	霜柱	天文
8410	大正8年	冬の部	霜柱の中に去來が墓石哉	霜柱	天文
8411	大正8年	冬の部	丈山の足跡見よや霜柱	霜柱	天文
8412	大正8年	冬の部	松間を僧俗二人霜柱	霜柱	天文
8413	大正8年	冬の部	霜柱金色堂は鎖されて	霜柱	天文
8414	大正8年	冬の部	武蔵野の芒残りぬ霜柱	霜柱	天文
8415	大正8年	冬の部	霜柱寒雁鳴いて渡りけり	霜柱	天文
8416	大正8年	冬の部	霜柱例の針子が小風呂敷	霜柱	天文
8417	大正8年	冬の部	霜柱水暖かに流れけり	霜柱	天文
8577	大正8年	冬の部	巖すべりて水に流るゝちり紅葉	散紅葉	植物
8578	大正8年	冬の部	落葉深く靱磨奥に聞ゆ也	落葉	植物
8579	大正8年	冬の部	早起の子等踏みてをり今朝落葉	落葉	植物
8580	大正8年	冬の部	大川に沿うてあるきぬ日短く	短日	時候
8581	大正8年	冬の部	落葉ふむで夜も行かふ隣どち	落葉	植物
8582	大正8年	冬の部	日の中に木葉ふり / \ 静まりぬ	木葉	植物
8583	大正8年	冬の部	霜ながら物皆朝を動きつゝ	霜	天文
8585	大正8年	冬の部	この山をしぐれて帰る湖の人	時雨	天文
8586	大正8年	冬の部	草錦霰消ゆるに降りそゝぐ	霰	天文
8587	大正8年	冬の部	水槽の底へ木葉や一時雨	木葉	植物
8588	大正8年	冬の部	麦蒔の晝餉や海の鳥來鳴く	麦蒔	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
8589	大正8年	冬の部	麦蒔に霜の兆の天青し	麦蒔	人事
8590	大正8年	冬の部	麦蒔人心無げやな草の花	麦蒔	人事
8591	大正8年	冬の部	麦を蒔く土軟かや雁稀に	麦蒔	人事
8592	大正8年	冬の部	我糧の麦蒔く夫婦憩ひけり	麦蒔	人事
8593	大正8年	冬の部	風掃くや麦蒔き終へし土と人	麦蒔	人事
8594	大正8年	冬の部	麦蒔の短日土の黒き哉	麦蒔	人事
8595	大正8年	冬の部	麦蒔の藁灰飛ぶや風曇り	麦蒔	人事
8596	大正8年	冬の部	麦蒔に遅き日出でゝぬくさ哉	麦蒔	人事
8597	大正8年	冬の部	凧の下に麦蒔しづまりぬ	麦蒔	人事
8598	大正8年	冬の部	北國の麦蒔日和称へけり	麦蒔	人事
8600	大正8年	冬の部	風呂吹の湯氣の中より宣はく	風呂吹	人事
8610	大正9年	冬の部	未了寒し決定の時尚寒し	寒さ	時候
8611	大正9年	冬の部	雪舞ふや鴛鴦見失ふ水の隈	雪	天文
8612	大正9年	冬の部	篋の雪に朝茶の煙かな	雪	天文
8613	大正9年	冬の部	雪ちるや神の泉の苔の上	雪	天文
8614	大正9年	冬の部	湖照るや松のあはひの比良の雪	雪	天文
8615	大正9年	冬の部	曉天の第一砲や雪の山	雪山	天文
8616	大正9年	冬の部	鷹飛ぶや峯の雪ふむ旅の者	雪	天文
8617	大正9年	冬の部	薄雪や梅の在所の道普請	雪	天文
8618	大正9年	冬の部	日色なし雪に聳ゆる雪の山	雪	天文
8619	大正9年	冬の部	簾外の雪に小櫛や歌舞の町	雪	天文
8620	大正9年	冬の部	かれ / \ し芒に雪の小鳥哉	雪	天文
8621	大正9年	冬の部	神木にはや道絶えし深雪かな	雪	天文
8622	大正9年	冬の部	古椿雪暖かにすべりけり	雪	天文
8624	大正9年	冬の部	言靈の鶯の春をも待たず	春待	時候
8626	大正9年	冬の部	可憐綺夢驚いてこたつ冷ゆ	炬燵	人事
8627	大正9年	冬の部	蒲團去ればこたつの骸古びたり	炬燵	人事
8628	大正9年	冬の部	我と老いぬこたつ蒲團の蝶鳥も	炬燵	人事
8629	大正9年	冬の部	こたつ出て狩に行く人見送りぬ	炬燵	人事
8630	大正9年	冬の部	こたつして曾遊遠き思かな	炬燵	人事
8631	大正9年	冬の部	置こたつ故人遠く寄す吉野の句	炬燵	人事
8632	大正9年	冬の部	蠅生きてこたつ蒲團の香に漂ふ	炬燵	人事
8633	大正9年	冬の部	こたつ知らぬ老の僕ぞ何にゆく	炬燵	人事
8634	大正9年	冬の部	こたつ蒲團の裾辺玩具の鳥獸	炬燵	人事
8635	大正9年	冬の部	こたつ蒲團の香を吐く雪の小庭哉	炬燵	人事
8750	大正9年	冬の部	物潜みつくして落葉静まりぬ	落葉	植物
8751	大正9年	冬の部	我と共に落葉ふみ行く人もなし	落葉	植物
8752	大正9年	冬の部	日暮るゝに落葉掃残す一樹哉	落葉	植物
8754	大正9年	冬の部	詩書堆裏兒等橙を玩ぶ	橙	植物
8912	大正10年	冬の部	風吹けバ物の悲しき釣干菜	干菜	人事
8913	大正10年	冬の部	物の緒の枯木に絡む鷹野哉	枯木	植物
8921	大正11年	冬の部	鳥寒くさかしまに落つ壑の底	寒さ	時候
8922	大正11年	冬の部	冬雲の明るき處なかりけり	冬の雲	天文
8923	大正11年	冬の部	冬雲と流るゝ茶毘の煙哉	冬の雲	天文
8924	大正11年	冬の部	人々も柩も一時吹雪哉	吹雪	天文
8925	大正11年	冬の部	いつち行きし我子や冬木そゝり立つ	冬木	植物
9102	大正11年	冬の部	武藏野の冬菜所や富士白し	冬菜	植物
9103	大正11年	冬の部	武藏野の霜に面を曬しけり	霜	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
9105	大正11年	冬の部	岩山に凍えし鳥と見ゆる哉	凍る	天文
9106	大正11年	冬の部	川涸れて生物何に潜みけむ	川涸	天文
9108	大正11年	冬の部	筆硯を凍てさせじとす冬籠	冬籠	人事
9110	大正11年	冬の部	折ふしハ冬至近き日さす故に	冬至	時候
9111	大正11年	冬の部	曼陀羅を後ろに落葉踏去りぬ	落葉	植物
9112	大正11年	冬の部	落葉踏むこと良久し富士見ゆる	落葉	植物
9113	大正11年	冬の部	岩山に吹きも溜らぬ落葉哉	落葉	植物
9114	大正11年	冬の部	東京より歸れば落葉庭を埋む	落葉	植物
9115	大正11年	冬の部	谿落葉くゞり來て水明かに	落葉	植物
9116	大正11年	冬の部	桑の何の五畝の落葉のつもるまゝ	落葉	植物
9117	大正11年	冬の部	落葉焚きし烟うすれてたそがるゝ	落葉	植物
9118	大正11年	冬の部	落葉かけバ水自から流れけり	落葉	植物
9119	大正11年	冬の部	庭もせの落葉静まる月夜哉	落葉	植物
9120	大正11年	冬の部	日中は人も落葉も騒がしき	落葉	植物
9121	大正11年	冬の部	水際の葦四五本や鴨遊ぶ	鴨	動物
9122	大正11年	冬の部	水鳥の飛ぶ颯爽と水の上	水鳥	動物
9123	大正11年	冬の部	この頃の悲しき色や冬の雲	冬の雲	天文
9124	大正11年	冬の部	冬構ガラスの明り頼もしき	冬構	人事
9129	大正12年	冬の部	枯れ / \し藪や茨の実生きてあり	枯茨	植物
9130	大正12年	冬の部	叫ぶものに皆いのちある吹雪哉	吹雪	天文
9131	大正12年	冬の部	冬川を渡らんと思ふ狐哉	冬川	天文
9132	大正12年	冬の部	冬川を偶々過ぎし雀かな	冬川	天文
9133	大正12年	冬の部	冬川に何する人と鴉かな	冬川	天文
9134	大正12年	冬の部	煙揚げて凧の日を山仕事	凧	天文
9135	大正12年	冬の部	一軸の外凧や茶味禅味	凧	天文
9136	大正12年	冬の部	凧の凧ぎて不斷の泉哉	凧	天文
9137	大正12年	冬の部	凧の中にいさかふ小者哉	凧	天文
9138	大正12年	冬の部	凧の響き渡りぬ寺林	凧	天文
9139	大正12年	冬の部	凧に生きて届きし海峯哉	凧	天文
9140	大正12年	冬の部	凧や寺に寄合ふ小作人	凧	天文
9141	大正12年	冬の部	凧や馬を犒ふ小百姓	凧	天文
9142	大正12年	冬の部	凧や馬引き返る年貢人	凧	天文
9143	大正12年	冬の部	凧の中に尚在り賣茶翁	凧	天文
9144	大正12年	冬の部	凧や火明り断えぬ一部落	凧	天文
9145	大正12年	冬の部	凧に木つゝく鳥の忙がしき	凧	天文
9146	大正12年	冬の部	凧に物貯へむ土掘りつ	凧	天文
9147	大正12年	冬の部	飢鳥枝に犯さんと欲す氷餅	氷餅	人事
9148	大正12年	冬の部	梅槎枒たり軒に聯ねし氷餅	氷餅	人事
9149	大正12年	冬の部	氷餅初更の水を出にけり	氷餅	人事
9151	大正12年	冬の部	雪皎々この一ところ塵もなし	雪	天文
9152	大正12年	冬の部	雪積みて黄泉いよゝ遠きかな	雪	天文
9154	大正12年	冬の部	筆凍てゝ今はた消えし面影よ	凍る	天文
9155	大正12年	冬の部	墓邊護る冬木の枝の細々と	冬木	植物
9156	大正12年	冬の部	寒ン晴に藪下水の光かな	寒晴	天文
9157	大正12年	冬の部	手に在りて鋸鈍き寒さかな	寒さ	時候
9158	大正12年	冬の部	雪雲の又しも我にかぶさりぬ	雪	天文
9159	大正12年	冬の部	雪の山深く入にし獵夫かな	雪山	天文
9160	大正12年	冬の部	鬣の雪揮ひけり廢口	雪	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
9161	大正12年	冬の部	一方に照返す日や雪戦	雪遊び	人事
9162	大正12年	冬の部	雪に伏す竹や夜学の小提灯	雪	天文
9163	大正12年	冬の部	大雪の門辺煤日のはした女等	雪	天文
9164	大正12年	冬の部	庭椿の雪すべり落つ日の匂ひ	雪	天文
9165	大正12年	冬の部	雪堅し杉の下道社まで	雪	天文
9166	大正12年	冬の部	雪の暮何に宿らむ小禽哉	雪	天文
9167	大正12年	冬の部	家雪にうもれて午の鶏鳴きぬ	雪	天文
9168	大正12年	冬の部	薄雪の足痕よべの千鳥かな	雪	天文
9292	大正12年	冬の部	時雨めきて菊の葉ぬらすあまたゝび	時雨	天文
9294	大正12年	冬の部	大根引く里川木葉流るゝに	大根引	人事
9295	大正12年	冬の部	菊未だ枯れず大根引く庵よ	大根引	人事
9296	大正12年	冬の部	洗上げて大根月夜となりにけり	大根	植物
9297	大正12年	冬の部	暮雲紅し大根引かれし畠の上	大根引	人事
9298	大正12年	冬の部	風呂吹と僧に乞はれつ大根引	大根引	人事
9299	大正12年	冬の部	金福寺句座の人見ゆ大根引	大根引	人事
9300	大正12年	冬の部	門外に大根の馬を駐めけり	大根	植物
9301	大正12年	冬の部	寺庭に年貢の大根積にけり	大根	植物
9302	大正12年	冬の部	路の邊の芒も刈りぬ大根引	大根引	人事
9303	大正12年	冬の部	大根引く我参勤のお大名	大根引	人事
9305	大正12年	冬の部	短日の舟寄るべなき大河哉	短日	時候
9306	大正12年	冬の部	筆硯匆々枯菊を顧みず	枯菊	植物
9307	大正12年	冬の部	枯菊の雨も乾かず暮にけり	枯菊	植物
9308	大正12年	冬の部	古松を便りに住むや菊枯るゝ	枯菊	植物
9309	大正12年	冬の部	枯菊の小家出でゆく獵夫哉	枯菊	植物
9310	大正12年	冬の部	枯菊を刈て書齋に退きぬ	枯菊	植物
9311	大正12年	冬の部	短日や馬に賃して曠野ゆく	短日	時候
9312	大正12年	冬の部	短日の山の尖りの雲明かき	短日	時候
9313	大正12年	冬の部	短日や例の刻來る郵便夫	短日	時候
9314	大正12年	冬の部	暮早し枯木の中の人の聲	短日	時候
9315	大正12年	冬の部	大根畑見渡せば富士眞白なり	大根	植物
9317	大正12年	冬の部	蕪の神大根の神や神謀り	雑	雑
9326	大正13年	冬の部	このたびの果しも知らず冬日哉	冬の日	時候
9328	大正13年	冬の部	いへぬちに溢るゝ聲や雪の上	雪	天文
9330	大正13年	冬の部	日當れば冬木に倚らむ思哉	冬木	植物
9331	大正13年	冬の部	などてこの涙凍らんひまも無き	凍る	天文
9332	大正13年	冬の部	その跡を追へども雪の果もなき	雪	天文
9334	大正13年	冬の部	早梅のそらだきものや御文管	早梅	植物
9335	大正13年	冬の部	鳳笙鸞竿み空の霜に振ひけり	霜	天文
9470	大正13年	冬の部	冬嶺を看るに忍びず秀孤松	冬山	天文
9471	大正13年	冬の部	筐底をさぐりつくしぬ小夜しぐれ	時雨	天文
9472	大正13年	冬の部	例年の男傭うて冬構	冬構	人事
9475	大正13年	冬の部	凍蝶も知章が馬に舞出でぬ	凍蝶	動物
9476	大正13年	冬の部	冬ごもり硯の田地たのもしき	冬籠	人事
9478	大正13年	冬の部	此寒さ不識といふぞ愚なる	寒さ	時候
9480	大正13年	冬の部	補陀落の岸か浪路か小夜千鳥	千鳥	動物
9481	大正13年	冬の部	画幅もちて濡れじと人來しぐるゝ日	時雨	天文
9483	大正13年	冬の部	大儒迎ふ綴の錦京しぐれ	時雨	天文
9485	大正13年	冬の部	石玄黄几上霜見る冬籠	冬籠	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
9486	大正13年	冬の部	樹の枝の雪ちる中や朝の人	雪	天文
9497	大正14年	冬の部	古妻の暇あれや輝薬貼る	靴	人事
9499	大正14年	冬の部	筆法に似たるものなし冬木立	冬木	植物
9500	大正14年	冬の部	折ふしの雀も寒の名残哉	寒	時候
9502	大正14年	冬の部	顧みて又冬川を越ゆらんか	冬川	天文
9503	大正14年	冬の部	雪穴に陥りしこそ不覚なれ	雪	天文
9505	大正14年	冬の部	雪ふりやまず梅の花に寒からむ	雪	天文
9507	大正14年	冬の部	梅も咲かねど適く所あり鶴に騎る	鶴	動物
9647	大正14年	冬の部	落葉二ツ廿年の情百里の感	落葉	植物
9649	大正14年	冬の部	手應への重さ軽さや莖の石	莖漬	人事
9651	大正14年	冬の部	枯野行く / \ 馬の蹄の高鳴に	枯野	天文
9652	大正14年	冬の部	風吹いて我を露はに枯野哉	枯野	天文
9653	大正14年	冬の部	北風を避くべきもなし馬の上	北風	天文
9655	大正14年	冬の部	むらしぐれ幾たび馬の躓きぬ	時雨	天文
9656	大正14年	冬の部	うつむきてしぐるゝまゝや馬の上	時雨	天文
9657	大正14年	冬の部	我馬や伏屋の落葉踏鳴らす	落葉	植物
9658	大正14年	冬の部	游草の悪句刪らむ年忘	年忘	人事
9661	大正14年	冬の部	數知れぬ落葉の中の二片か	落葉	植物
9662	大正14年	冬の部	墓石に雨と降りけむ落葉是	落葉	植物
9671	大正15年	冬の部	冬の水いづち潜りて流れゆく	冬の水	天文
9673	大正15年	冬の部	蝶鳥の間静かに追儼	追儼	人事
9675	大正15年	冬の部	雪深しこの一筋の道祖神	雪	天文
9676	大正15年	冬の部	杉村の家々はたきをり煤筵	煤拂	人事
9677	大正15年	冬の部	杉村や黛つくる雪の山	雪山	天文
9678	大正15年	冬の部	大川の岸高み煤はたきをり	煤拂	人事
9679	大正15年	冬の部	煤はたく音大川を渡りくる	煤拂	人事
9905	大正15年	冬の部	紅葉ちりて菊の高さに廬せり	散紅葉	植物
9907	大正15年	冬の部	巖角や霜に嘯く帟の鬚	霜	天文
9908	大正15年	冬の部	人待てバ芒ちる見ゆ日短に	短日	時候
9909	大正15年	冬の部	時ならぬ砧打出す日短に	短日	時候
9910	大正15年	冬の部	短日や搗きこぼしたる畑つ物	短日	時候
9911	大正15年	冬の部	短日や賣れて乏しき唐辛子	短日	時候
9912	大正15年	冬の部	海山の風北になり暮急ぐ	短日	時候
9914	大正15年	冬の部	達磨忌の一時猛雨の人絶えし	達磨忌	人事
9916	大正15年	冬の部	庭上の霜に傲るハ何々ぞ	霜	天文
9917	大正15年	冬の部	凧や倉廩満ちて人往來	凧	天文
9918	大正15年	冬の部	凧や脂がゝりし魚の味	凧	天文
9919	大正15年	冬の部	凧や京のくさびら遅れつく	凧	天文
9920	大正15年	冬の部	凧の庵を見せけり裏の山	凧	天文
9921	大正15年	冬の部	凧に陵荒るゝ涙かな	凧	天文
9922	大正15年	冬の部	凧や木葉の下の硯石	凧	天文
9923	大正15年	冬の部	凧や狸のわざの水止まる	凧	天文
9924	大正15年	冬の部	凧に膝つき合はず庵淺し	凧	天文
9925	大正15年	冬の部	凧や銀杏葉溜る一ト所	凧	天文
9926	大正15年	冬の部	凧に紙一帖の使かな	凧	天文
9927	大正15年	冬の部	到來の五升の酒も冬構	冬構	人事
9928	大正15年	冬の部	思ひきや芋山の如し冬構	冬構	人事
9929	大正15年	冬の部	佗ぶらくハ嵐と住まん冬構	冬構	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
9930	大正15年	冬の部	冬構梅の古木ハ与からず	冬構	人事
9931	大正15年	冬の部	我庵ハ冬を構へず山河在り	冬構	人事
9933	大正15年	冬の部	夢なれや天地に盈つる河豚の氣	河豚	動物
9935	大正15年	冬の部	凧に水の甘さを覚ゆらむ	凧	天文
9939	大正15年	冬の部	凧や家に居て柚子の包解く	凧	天文
9940	大正15年	冬の部	凧を遠く至りぬ柚子も葉も	凧	天文
9942	大正15年	冬の部	ふぐ汁の父の獨に灯しけり	河豚汁	人事
9943	大正15年	冬の部	河豚の眼や磯の社の常緑樹	河豚	動物
9944	大正15年	冬の部	河豚汁や窓の外行く紅毛人	河豚汁	人事
9945	大正15年	冬の部	河豚の座や果實が装ふ一緑葉	河豚	動物
9946	大正15年	冬の部	ふぐの友二たび三たび會しけり	河豚	動物
9948	大正15年	冬の部	大霜の後の菊觀し幾人ぞ	霜	天文
9949	大正15年	冬の部	只斯の心菊を枯れしめず	枯菊	植物
9950	大正15年	冬の部	用もなき曆買ふなり主人ぶり	曆売	人事
9954	昭和2年	冬の部	筆の穂の凍ることなき力哉	凍る	天文
9956	昭和2年	冬の部	ひたぶるに蹶はらゝかす深雪哉	雪	天文
9957	昭和2年	冬の部	朝な / \ 雪の淨らや島咽ぶ	雪	天文
9958	昭和2年	冬の部	春近し一雨に遷る鶴の群	春近し	時候
9959	昭和2年	冬の部	誰々に紅買ひやらむ春鄰	春近し	時候
9960	昭和2年	冬の部	芹かあらぬか春まちごゝろさゝ流れ	春待	時候
9961	昭和2年	冬の部	せゝらぎや春まちごゝろ芹を見る	春待	時候
9962	昭和2年	冬の部	ともしさのつとも春まつ帰省哉	春待	時候
9963	昭和2年	冬の部	日々消ぬる獸の踪や春鄰	春近し	時候
9965	昭和2年	冬の部	行年や追失ひし紙魚一ツ	行年	時候
9966	昭和2年	冬の部	行年や帙にうするゝはなだ色	行年	時候
9967	昭和2年	冬の部	水鳥の浮くも潜るも淨土哉	水鳥	動物
10164	昭和2年	冬の部	山眠る中に群松吼ゆる哉	山眠る	天文
10165	昭和2年	冬の部	百姓に教へて倦まず山眠る	山眠る	天文
10166	昭和2年	冬の部	昔ながらの山眠るさへ人戀し	山眠る	天文
10167	昭和2年	冬の部	涉らじのせみの小川や山眠る	山眠る	天文
10168	昭和2年	冬の部	鳩の湖は古き深さよ山眠る	山眠る	天文
10170	昭和2年	冬の部	櫓細し鳥海の裏おろす風	櫓	植物
10171	昭和2年	冬の部	山峽や枯れぬ尾花に家幾つ	芒	植物
10172	昭和2年	冬の部	霜の後の月岩山にかゝりけり	霜	天文
10173	昭和2年	冬の部	草枯や海土が墓皆海に向く	草枯	植物
10175	昭和2年	冬の部	短日をちり尽す沙羅双樹の葉	短日	時候
10176	昭和2年	冬の部	縦の実を啄む鳥もなかりけり	木の實	植物
10178	昭和2年	冬の部	鶏頭の種採ることを咎むるな	鶏頭	植物
10179	昭和2年	冬の部	詩仙堂に寄らで小春を帰洛哉	小春	時候
10181	昭和2年	冬の部	短日の風争ふや四派の松	短日	時候
10182	昭和2年	冬の部	朱の椀にすこし飯盛る霜夜哉	霜	天文
10183	昭和2年	冬の部	小春日の暮るゝに近し水煙	小春	時候
10184	昭和2年	冬の部	小春日や暮れて竹鳴る嵯峨戻り	小春	時候
10185	昭和2年	冬の部	花の種むさぼり採りぬ日の小春	小春	時候
10186	昭和2年	冬の部	小春日のつゞくらし宵々の月	小春	時候
10187	昭和2年	冬の部	進一步霜を挟まぬ石もなし	霜	天文
10188	昭和2年	冬の部	わうじきの調べや鐘の幾時雨	時雨	天文
10190	昭和2年	冬の部	菊昔ながら畿内の霞かな	菊	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
10192	昭和2年	冬の部	数へ来る木菴即非茶の蕾	茶の花	植物
10193	昭和2年	冬の部	黄檗の道場冬の片日哉	冬	時候
10195	昭和2年	冬の部	かりそめに訪ふ旧蹟や日短き	短日	時候
10196	昭和2年	冬の部	短日や指儂へて國遠し	短日	時候
10197	昭和2年	冬の部	短日や誰ぞ下り來る大悲閣	短日	時候
10198	昭和2年	冬の部	短日や鶯の声惡み客の去る	短日	時候
10200	昭和2年	冬の部	短景に鳥を點ずる梢哉	雑	雑
10202	昭和2年	冬の部	帶解の子安に柿を奉る	柿	植物
10203	昭和2年	冬の部	片枝の紅葉さしいでつ吉野口	紅葉	植物
10204	昭和2年	冬の部	香具山の霧おろしけり青蜜柑	霧	天文
10205	昭和2年	冬の部	歌垣の昔を匂へ草の花	草花	植物
10207	昭和2年	冬の部	川波をくゞるは国栖の何落葉	落葉	植物
10209	昭和2年	冬の部	さながらに菊伏す山路間なき雨	菊	植物
10210	昭和2年	冬の部	濃かに野菊咲残る笠置道	野菊	植物
10211	昭和2年	冬の部	吉の山竹もしぐるゝ宿り哉	時雨	天文
10212	昭和2年	冬の部	太閤ハしくれを知らずよしの山	時雨	天文
10213	昭和2年	冬の部	炭ついでしくれに居りぬよしの山	時雨	天文
10214	昭和2年	冬の部	そのかみや珠も錦もしぐれつゝ	時雨	天文
10215	昭和2年	冬の部	旅の髭伸びぬ吉野はしくれつゝ	時雨	天文
10217	昭和2年	冬の部	しくれ來て提灯消えつ御陵道	時雨	天文
10218	昭和2年	冬の部	常盤木のしくれ畏しよし野山	時雨	天文
10219	昭和2年	冬の部	一處落葉つもりぬよしの山	落葉	植物
10220	昭和2年	冬の部	陵やありとも見えぬしぐれの灯	時雨	天文
10222	昭和2年	冬の部	神ながら古りゆく神輿幾しぐれ	時雨	天文
10224	昭和2年	冬の部	とく / \ の清水を後に日短き	短日	時候
10226	昭和2年	冬の部	石はしる水よ落葉よ五百年	落葉	植物
10228	昭和2年	冬の部	壮士が鎧の塵か草紅葉	草錦	植物
10230	昭和2年	冬の部	子規の字の為山のと浪花夜寒なる	夜寒	時候
10232	昭和2年	冬の部	青に黄にお手々の蜜柑つぶらなる	蜜柑	植物
10233	昭和2年	冬の部	之にしあれや旅の夜寒の袖ふるゝ	夜寒	時候
10234	昭和2年	冬の部	吉野出て見はてぬ夢の千鳥哉	千鳥	動物
10236	昭和2年	冬の部	露霜の結ばむ草木無かりけり	露霜	天文
10237	昭和2年	冬の部	凧の石に留めず雲の影	凧	天文
10239	昭和2年	冬の部	牛祭すぎで戀しさ三十年	牛祭	人事
10241	昭和2年	冬の部	ひし / \ と霜に鳴りけむ巨枝大葉	霜	天文
10245	昭和2年	冬の部	俗めくや落柿舎の柿落葉ふむ	柿落葉	植物
10247	昭和2年	冬の部	色紙へぎて後の寒さに誰かゐる	寒さ	時候
10248	昭和2年	冬の部	旅に在りて何を主や嵯峨の月	月	天文
10249	昭和2年	冬の部	茶の花の咲き澄みて人知れずこそ	茶の花	植物
10251	昭和2年	冬の部	秋深し神馬も戀ふる五十鈴川	秋深し	時候
10252	昭和2年	冬の部	しだり尾の長鳴鳥や夕紅葉	紅葉	植物
10254	昭和2年	冬の部	糸瓜見る因みに憶ふ三十年	糸瓜	植物
10255	昭和2年	冬の部	雁來紅上野の森ハ見えざりけり	雁來紅	植物
10257	昭和2年	冬の部	木葉ふるや掃へども水そゝげども	木葉	植物
10259	昭和2年	冬の部	一勺の酒そゝぐべき落葉哉	落葉	植物
10261	昭和2年	冬の部	露ながら主人がくれし柿一ツ	柿	植物
10262	昭和2年	冬の部	むさし野の落葉掃かれぬ細々に	落葉	植物
10263	昭和2年	冬の部	常盤木や青きにひそむ烏瓜	烏瓜	植物

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
10264	昭和2年	冬の部	往返り柿落葉ふむ斯心	柿落葉	植物
10266	昭和2年	冬の部	木深さを鳴穿ち去る百舌の声	鶇	動物
10267	昭和2年	冬の部	衡宇を望んで落葉踏鳴らす	落葉	植物
10268	昭和2年	冬の部	帰り来て菊の香にあるしばし哉	菊	植物
10269	昭和2年	冬の部	帰りつけバ妻ハ大根引了る	大根引	人事
10270	昭和2年	冬の部	落尽す銀杏葉誰そや掃尽す	落葉	植物
10272	昭和2年	冬の部	草枯や一夢と消えし都の灯	草枯	植物
10273	昭和2年	冬の部	峰のあたり尚しぐるらむよしの山	時雨	天文
10275	昭和2年	冬の部	菊の香のあまりの中に生れけり	菊	植物
10278	昭和2年	冬の部	山賤は櫓に櫻を焚にけり	櫓	人事
10279	昭和2年	冬の部	御方に櫓けふらすな吉野人	櫓	人事
10280	昭和2年	冬の部	堅氷のほとりふし櫓根櫓哉	櫓	人事
10281	昭和2年	冬の部	櫓つみて砦に似たり國の守	櫓	人事
10282	昭和2年	冬の部	雪かぶる櫓や朝々取くづす	櫓	人事
10284	昭和2年	冬の部	此菊を枯らさじと日に省る	菊	植物
10286	昭和2年	冬の部	迦陵嚩伽啄み飽ける果かも	木の實	植物
10290	昭和2年	冬の部	寒日や勅語捧讀奉答歌	寒さ	時候
10291	昭和2年	冬の部	橘緑耀きて禮を行へり	橘	植物
10292	昭和2年	冬の部	杳ならびたり此日の大霜に	霜	天文
10293	昭和2年	冬の部	講堂の窓の松影山眠る	山眠る	天文
10294	昭和2年	冬の部	物の聲揚がる枯野の阪下に	枯野	天文
10296	昭和2年	冬の部	何すとて枯菊をおく厨かな	枯菊	植物
10298	昭和2年	冬の部	野に山に冬菜一種なかりけり	冬菜	植物
10300	昭和2年	冬の部	せんなしや又灰となる火桶の火	火桶	人事
10320	昭和3年	冬の部	袖ふれんよすがもあらず冬木立	冬木	植物
10322	昭和3年	冬の部	凍解を心に會して起チにけ里	凍解	地理
10324	昭和3年	冬の部	水鳥の黎明さして羽搏ちけり	水鳥	動物
10326	昭和3年	冬の部	寒椿澆ぐに雪を以ってせむ	冬椿	植物
10603	不詳	冬の部	鉢叩とは泣面の竹の函(函)	鉢叩	人事
10604	不詳	冬の部	寺に入る酢賣賢し大三十日	大三十日	時候
10605	不詳	冬の部	大三十日蒟蒻賣を罵しりぬ	大三十日	時候